

新出史料『蘭学問答』と『瘍医問答』 - 『和蘭医事問答』の初稿と第二稿-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 満 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1572

【史料紹介】

新出史料『蘭学問答』と『瘍医問答』

——『和蘭医事問答』の初稿と第二稿——

平野 満

寛政七（一七九五）年に板行された『和蘭医事問答』（上下二冊）

は建部清庵と杉田玄白の間で交わされた二往復書簡「明和七（一七七

〇）年閏六月十八日附 清庵問書・安永二（一七七三）年正月附 玄白

答書／安永二年四月九日附 清庵問書・安永二年十月十五日附 玄白答

書」四通を収める。本書は初期蘭学の様子をいきいきと伝える史料と

して大変貴重で、これまでも何度か活字化され、初期蘭学の研究が進

められてきたことは周知のとおりである。

本書出版の経緯について、清庵の四男由清で後に玄白の養子となり

杉田家を継いだ、杉田伯元（名は勤、字は士業、紫石と号す）が附言

の第一条および第三条に次のように記す¹⁾。伯元は本書の跋にも出版の

経緯を記すが、大略はこの附言に尽くされている（傍線は筆者）。

一 此書ハ建部杉田ニ先生往復ノ書簡ニシテ、当時門人塾中ニ輯録シ

名ケテ蘭學問答或ハ瘍醫問答ト稱ス。余顧フニ、此書ノ論説、原

ト和蘭瘍科ノ問難ニ端ヲ起ストイヘトモ、然トモ通編ノ大意、醫

流ノ宗源ニ係レリ。故ニ今改メ題シテ和蘭醫事問答ト云。

一 此書冊ヲナシテ後子、門人及ヒ書肆屢々請フテ木ニ上セントス。

然トモニ先生敢テコレヲ許サズ。而モ笑テ曰、瑣々タル小言豈ニ

何ソ不朽トスルニ足ンヤト。無^{シテ}幾建部先生老テ奥ノ地ニ没ス。

杉田先生ノ業ハ、日々月々ニ隆盛ニシテ、從游之徒如^ク雲千里負^レ

笈來集リ、社盟ニ與ル者日一日ヨリ甚シ。先進ノ塾長必ス先ツ此

書ヲ後進ノ徒弟ニ示シ、其レヲシテ斯業ノ來由ヲ知ラシム。或ハ

先生ニ此書アルコトヲ傳聞シ來リ、請モノ少ナカラス。而シテ彼

此傳播轉借シ、密ニ謄寫ニ勞スルノミニアラズ、紙葉散逸、原本

ヲ失フコト數回ニ及ベリ。且ツ傳寫ノ際誤謬モ亦少シトセス。故
ニ、余愛レ之^ルコト久シ。因テ屢々上^レ梓コトヲ請フ。然トモ先生許
サズ。其言モマタ如^レ前。余頃口竊ニ此レヲ家兄清菴ニ謀ル^ル。兄^ハ姓^ハ健
由水、字亮策、父祖ノ號ヲ襲テ。清庵ト稱ス。奥ノ一ノ關ニ住ス。兄固ヨリ其宿意アルヲ以テ深く此舉ヲ欣
躍ス。因テ相俱ニ力ヲ戮セ、考訂シテ強テ此ヲ劔^ニ附シ、以テ
家塾ニ収ムト云。
寛政乙卯夏六月

杉田 勤士業識

玄白門人大槻玄沢も『六物新志』(天明元年玄沢凡例、同六年玄白
序・刊)の題言、および『蘭訳梯航』(文化十三年成稿)で蘭学の起
原について述べた一節に次のようにいう。

二先生往復ノ和牘、互ニ瘍醫ノ要道ヲ論ス。故ニ吾力輩集テ、而
シテコレヲ編シニ卷ト作シ、名ケテ瘍醫問答ト曰フ。書肆數々コ
レヲ刻センコトヲ求ムル者有リ。行々當ニコレヲ請テ、而シテ世
ニ公ニスベシ。『六物新志』題言)

抑、此学ノ起原セシコトハ、蘭化先生ノ蘭訳箋、及蘭訳草稿、並
鶴斎先生ノ蘭学問答^{印行ノ時、改メテ和蘭医事問答ト題セリ}、同事始等ノ撰書ニ見へ、『蘭
訳梯航』卷上)

杉田玄白は『蘭学事始』(文化十二年成稿)で次のようにいう。

門人等その書通を書きあつめ蘭学問答と名づけ留めたり。後に子
弟ら蔵版となしぬ。和蘭医事問答と題せしものはこれなり。

本書ははじめ『蘭学問答』、のち『瘍医問答』の書名をもって杉田
玄白の私塾天真楼に備えられ、入門者があれば必ず本書を読ませて蘭
学の来由を知らしめた。本書の存在を知り、筆写を請う者も少なく
なかったという。その結果、「紙葉散逸、原本ヲ失フコト數回ニ及」び、
「伝写ノ際、誤謬モ亦少シトセズ」という状態であった。出版される
前の本書がさかんに筆写されて読み継がれていった様子が窺える。に
もかわらず、今日まで『蘭学問答』あるいは『瘍医問答』の書名を
もつ写本について言及されることはなかった。

このような状況を憂いた杉田伯元は師玄白に出版を請うたが実現し
なかった。『蘭学問答』にあって、『和蘭医事問答』『瘍医問答』では
省略された安永二(一七七三)年十月十五日附玄白書簡の追而書に以
下ようにある。早くから板行計画があったことがわかる。この玄白書
簡への同年十二月十五日附清庵返書^⑤の追而書をあわせて以下に引用す
る。この遣り取りからは、両者とも板行に反対の様子は窺えない。ど
のような事情があったのかは不明だが、板行は実現しなかった。

初より御往返之御書翰、蘭学開候為ニも宜可有御座候間、開板も

仕候様二と強而勸候者御座候。如何可仕哉。思召も無御座候ハ、私義も右存寄二従ひ可申哉とも奉存候。先御内談申上候。

〔蘭学問答〕所収玄白書簡

御往返之書状、蘭学開ケ候為二も可相成候間、開板被成候様御勸、申者御座候二付、拙老方指支無御座候ハ、其意二御従可成哉之由御内談被仰下、入御念候御事奉存候。於拙老、本望至極被存候。何分思召次第開板被仰付候様仕度候。乍去、後世二殘候事二御座候間、拙老覚違二而書違候事共可有御座候間、無御遠慮御直し開板被仰付被下度奉願候。

〔蘭学問答〕所収清庵書簡

安永九（一七八〇）年になって、大槻玄沢たちが再び板行を企てた。『蘭学問答』に校定を加え、新たに序を付して書名を『瘍医問答』と改めたが、これも出版できずにおわった。

その後、杉田伯元が兄建部清庵（名は由水、字は亮策、のち父を継いで清庵と称す）と相談しさらに校訂を加え、書名も『和蘭医事問答』と改めて寛政七（一七九五）年に出板したという。この時、玄沢の序は書き直され、新たに宇田川玄隨の序、杉田伯元の跋が付された。

上記の経緯からわかるように、『和蘭医事問答』収載の書簡は原書簡そのままではなく、少なくとも二度の校訂が加えられているという史料的な問題を抱えている。にもかかわらず、ほかにこれほどの好史料

が無かったため、初期蘭学の研究は大きく本書に依存してきた。

ここに紹介する『蘭学問答前編』（架蔵）は『和蘭医事問答』が出板される前に天眞楼において筆写されたものの転写本で、巻末の覚書「安永三申午年／蘭学衆中」から、『蘭学問答』成立から間もない安永三年に筆写されたものの転写と推定でき、もっとも往復書簡の原形に近いものである。『蘭学問答前編』が正式書名だが、『蘭学問答』の書名を用いた。

『瘍医問答』は一点だけ武田科学振興財団杏雨書屋に残る。玄白の門人広瀬周伯が筆写したもので『廣瀬周伯筆記』三冊のうち第三冊が本書である。これには邨山有成と安永九年二月撰文の大槻玄沢の序が付される。

『蘭学問答』『瘍医問答』『和蘭医事問答』に収められる書簡はおおむね同様の内容とはいえ、省略や加筆あるいは語句の一部に誤写とは考えられない違いが見られる。また『蘭学問答』は『瘍医問答』『和蘭医事問答』にはみえない新史料を含む。たとえば、玄白より早く清庵の質問状に返答した幕府医官岡田養仙との往復書簡が収められる。後二者に岡田養仙との往復書簡が収められなかったのは、清庵と玄白の問答に限ったためか、あるいは養仙の返答が清庵の疑念を晴らすには不十分と判断されたからか。岡田養仙については以下が知られる。

東都にて岡田養仙・藤本良泉（とよもと）の両医官は、六人まで観瞻し玉ひし由なれど、旧習を改めず、これといふ見識も立給はざりしに故に

や、生涯何の用を為し給はず。共に惜むべし。

〔玄白「形影夜話」(文化七年(一八一〇)刊)〕

古来医経に説きたるところの、肺の六葉両耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり。

官医岡田養仙老、藤本立泉老などはその頃まで七八度も腑分し給ひしよしなれども、みな千古の説と違ひしゆゑ、毎度毎度疑惑して不審開けず。その度々異状と見えしものを写し置かれ、つらつら思へば華夷人物違ひありやなど著述せられし書を見たることもありしは：〔蘭学事始〕^①。骨ヶ原で観臓した記事に続く文

蘭学の初期にあつては岡田養仙(一七二二—一七九七)も有力な蘭方医の一人であつた。養仙の返答はこの時期のいわゆる蘭方医が蘭方医学にたいしてどの程度の知識を有し、どのような認識をもつていたかを知るための貴重な史料である。

『蘭学問答』から『瘍医問答』、さらに『和蘭医事問答』へと後の知見による校訂が加えられてゆく過程は、とりもなおさず蘭学認識の進展(変遷)を示している。この校訂の内容をたどることは、初期蘭学の展開過程をたどることにほかならない。ここでは新史料を提供することを主眼とし、詳細な検討は別稿に譲る。

なお、『蘭学問答』と同時に入手した『蘭杉建文章問答後編』は、『和蘭医事問答』巻末の「紫石齋藏刻目錄」に嗣出とされ、その存在

は推定されていたがこれまで知られていなかったものである。「杉建」は「杉田建部」を略記したもので、本書には『蘭学問答』より後に玄白と清庵の間で交わされた(安永二年十二月十五日附)安永五年八月十六日附)二十二通の書簡を収める。興味深い内容をもつ新出史料であるが、紙幅の関係でこの紹介は別の機会に譲る。

註

- (1) 『和蘭医事問答』(寛政七年刊、卷之上下二冊)は国会図書館蔵。請求番号「二〇—二」による。なお、槐園と玄沢の序は内閣文庫本(『洋学上』岩波書店〈日本思想大系64〉の底本)とは順序が前後している。
- (2) 『六物新志』は『六物新志・一角纂考』(恒和出版〈江戸科学古典叢書32〉、一九八〇年刊)による。
- (3) 『蘭訳梯航』は『洋学上』(前掲)による。
- (4) 『蘭学事始』は緒方富雄校註、岩波文庫(一九八二年改版)による。
- (5) 『蘭杉建文章問答後編』(架蔵)による。
- (6) 『廣瀬周伯筆記』は武田科学振興財団杏雨書屋蔵「乾七〇六」。『瘍医問答』はその第三冊。請求番号「乾七〇六一三」。
- (7) 『形影夜話』は『洋学上』(前掲)による。
- (8) (4)に同じ。

なお、この史料の概要は『蘭学問答』『瘍医問答』『和蘭医事問答』の成立事情と異同と題して、二〇〇六年十二月十七日(於・電機通信大学)に開催された洋学史学会大会で口頭発表した。

凡例

翻刻にあたっては、原文どおりを原則としたが、次のような処置を
ほどこした。

- 1、合字「フ・ノ・ウ」は開いて「こと・して・より」などとした。
- 2、疊語のくは々とした。
- 3、漢字の旧字や異体字はできるだけ原文通りとしたが、現行字体に直したものもある。
- 4、句読点は私に施した。『瘍医問答』には朱の読点が付されるので参考にした。
- 5、明らかな誤写であっても強いて直さず（ママ）を付した。
- 6、当時の蘭学者たちが用いた左右に重なるカタカナ表記は、ウユのように表記し傍線を施した。
- 7、本文中の「」は丁替を示し、「（ 1オ）」は第二丁表の末尾を示す。
- 8、書き込みは「上欄書込み…」等として、適当な箇所を判断して挿入した。

『蘭学問答』

『蘭学問答前編』写本一冊。黄褐色の表紙、四針眼。縦二二八×横一五三ミリ。内題は「蘭学問答前編」。題簽は「蘭學問答前編 全」。

全四二丁（丁付なし）。用箋は赤色で刷られた四周子持枠（匡郭内…

縦一八三×横二二一ミリ）、半丁十行の界線をもち、表丁の匡郭外右下に「○イツ」と刷られる。版心に文字は無い。

* * * * *

蘭学問答前編

一紅毛人年々江戸え来ルニ、外科と云ハ見ゆれ共内科云ハ不見。紅毛ニハ内科ノ醫者ハ無事なりや。

一紅毛といへ共、風寒暑湿産前後婦人小兒の病無事不能。ことく膏藥油藥ノ類計ニテハ療治ならぬ筈也。然ハ内科なくてはならぬ事なるニ、日本ニ而紅毛流と称する者、皆膏藥油藥ノ類計ニ而腫物一通りの療治計する事不審也。長崎奉行え附て往き、一年彼地ニ居て帰れハ、鎗持ノ八藏、挟箱ノ六助も外科ニなりて八安、六齋など、名を付キ、紅毛真傳と（ 1オ）称するハ心得ぬ事也。長崎え往たり共、紅毛醫者の弟子ニ也、療治をも見習ひ紅毛の医書をも習はずには成べからず。長崎えさへ往けバなる事なりや。

一紅毛本草有ことハ聞及たれ共、田舎ニ而ハ見ることならず。右之本草を見れハ草木の氣味功能共ニ本草綱目などの様ニ知るゝ事也や。

一紅毛醫書も渡りたるや。

右四ヶ條、諸先生え御尋、委細書付御申越候様頼入存候。久々ニ而の面談珍敷さニ咄も錯雜前後致候間、失念も一々有之哉と、老年之身の上再會難期存（ 1ウ）候故、兼而語り申度と思へ候事

とも縷々筆に任せ書綴り、左に申達候。

一 今日本二而紅毛外科傳書と云ふ物、八卷書、十二卷書、新傳の六卷書など、名け、色々様々の書物夥敷有り。外科者流、家秘とすれども紅毛医の著述二あらず。通詞を頼て色々々の事を聞書二したるもの也。何程の明医より聞ても取次をする通詞か俗人故、日本人の稟賦と紅毛人の稟賦と不同、其土地の寒暖の違、衣食の異なる事をも不知、日本医の問事計を取次で通じてやる紅毛医も、我か用ひなれたる〔2オ〕事計を口ニ任せて云ふを筆まめに書きたるか八卷書、十二卷、六卷書、其外いろ様々の傳書と成りたるものなるべし。去ニ依而、どの書二も同じ事のミ多し。其を本ニして中華の医書の外科の部から拔集め、病論ヲ集合したるものと見ゆる也。正真の紅毛流と云ふもの二あらず。

一 紅毛の文字ハ日本のいろは同然に音計にて字儀ハなきと見ゆれハ、譬紅毛医書の文字を能讀ても、彼地の風俗事跡を不知ハ通すべからず。言葉ニ雅言俗語も有るべし。時々のはやり〔2ウ〕詞も有べし。草木の名も国々村々の称する所違有べし。病名も医者 of 称する處と民間の呼所と古今称呼の違有筈也。日本の紅毛流外科、其沙汰なく各家傳と称し吟味せざる事不審也。愚老、紅毛傳書といふもの拾四五部取集め見たるニ藥名色々々違ひあり。たとへバ白蠟をヘツキワス、一本ニベツテワス、一本ニトウルハンアル。乳香をトウセス、一本ニトウルス、一本ニコリハヌン、一ニレシイ、一ニウイロク、一ニマステキス、一ニステラスカラメイタ。如此、白蠟乳香ニ藥の名數

多あるを以考レハ異名數多あり。国々村里の方〔3オ〕言あり。古今称呼の違もある歟。雅名俗称も有べし。外科者流、傳書を秘し他え不出、誤りをも不正、家傳と号し廣く吟味せざる故、何レ是、何レ非なるや知るへからず。本来、紅毛の医書といふものを傳授せず膏藥油藥計ヲ習ひて、其レて一流を建立したる故也。紅毛の醫書渡りても、文字で埒明ざる事なれば用ニ不立也。日本ニも鳩摩羅什かことき人ありて、佛經を翻譯したる如く紅毛の医書を翻譯して漢字ニしたらバ正真の紅毛流か出来、唐の書を借らず外科の一家か〔3ウ〕出へし。其外、婦人小兒科などの妙術も有へし。其正據ハ天正年中、毛利第八と云ふ人、南蠻え渡海し彼地二十七ヶ年居り火術鉄炮の妙術を傳ひ、日本え歸り樅木民部と名改し其流を樅木流といふ。種々の妙術名譽をあらわし加州に仕宦し、其子樅木又兵衛と言者、家相續すと聞く。火術鉄炮の極秘傳ハ弟子井上源治郎と言者傳屬して仙臺へ仕宦す。其流法仙臺ニ残り、本多吉左衛門種信傳て比類なき妙術を極む。世ニ花火と言ハ根元此火術より出たる由。又其より以前の事ニや年代ハ不知、中條帶刀と言ふ人、是も〔4オ〕南蠻え渡海し婦人科医術を傳へ來り、奇効妙驗有之由。其子孫中術某、仙臺ニ有り。医術ハ其弟子中ノ目道味家ニ残り、兩人共ニ日本一家妙術の祖となる也。兩流共ニ唐の書を借らず一家を立たるに、紅毛の外科ハ紅毛名乗ハすれとも、内々を見れば皆唐の書から拔書して集合附會したるハ氣之毒千萬也。其レ故、内科の下役の様ニなり内科の先え立事ならず、獨道を往事ならぬ様ニなりたるハ残念至

極なる事也。唐にて外科といふハ明の陳實功、清の祁坤が輩、獨歩のありさま書面の通也。古人の語ニも、内の症或不及、其外外の症則必根于其内（〔4ウ〕）也と有り。膏藥油藥計外より貼りてハ埒明さる事有り。其故、内藥を用さすれば、内医ハ腫物の寒熱虚實を見知らぬ故、外科より相談を仕懸ねばならず、其も悪意地な内医ハ外科の言事ヲ不用、知らぬ事ニ我意を張り病人を誤る事多し。不得已、外科内科ヲすれば、射利のために内外兼而すると悪姓（悪）な医者共か誹謗するを聞バ、凡夫の淺猿しきハ嘖恚のたねとなり、自然ニ陰徳を破る事也と思てせず。外科一家にてせねバ能キ事ハならぬといふ理ハ知なから、只今迄、暫同然ニ而一生を暮したるハ残念也。婦人小兒（〔5オ〕）眼科口科各一家ヲなし、内科の指引を得ず獨立するニ、外科計獨道を往れぬハ口惜しき事ならずや。畢竟、彼八安六齋なんと、いふ鎗持の俄なる外科などが、三階松、三星同然ニ膏藥計覺て寒熱虚實をも分前ず、滅太無生ニ膏藥を貼りありく。巷ヶ年長崎ニ居て、紅毛人の形勢、船の様子杯遠見したをミそに長崎咄を賣りて、直傳じやと云ふて紛かし療治して居る内ニ、仕合能けれハ諸候（諸）方え仕宦をもすれとも、元來無学故内科の尻え附て廻りたるか、自然ニ内科ニまわさるゝ様ニなりたるへし。愚老壯年の頃より是を憂（〔5ウ〕）ぬれとも、紅毛の医書を見たる事ハなし。譬見たるとも翻譯なくてハ通ずべからず。然バ一向紅毛流を止ニして唐流を建立したき者と思ひぬれとも、自我作古程の器量ハなし。鬱々として日月を送りぬ。因て嫡子三省に此事を語聞せ、汝何とぞ江戸表にて明智

の人を尋、此事を計れと命じけるか、短命ニして先達而死す。愚老ハ最早齡傾き、氣力衰へ日用の事さへ物忘れする様也。殘る子供等ハ弱年也。如何ともすべき様なし。弟子共ニも、我死たる後なりとも何とぞ此志を継き一家をなせと（〔6オ〕）教也。江戸表ニハ廣き事なれば、先達而此道を建立したる人あるか、又紅毛医書を翻譯したる人有るべし。若し左様の書あらば、早速見たき者也。か様の事ハ大都會ニ而、位徳備りたる人か唱出さざれば成就せぬ事也。紅毛船日本え來りし始りは何時の頃なるや、年代ハ不知とも二三百年前後にてもや有らん。夫より今迄の間に紅毛の医書を翻譯する程の人なき事はあるまじ。然ハ今頃は翻譯の書有るかも知れず。邊鄙の地ニ居ては知れず、無念なる事也。偕又、紅毛の船にハ楫取の類、（〔6ウ〕）商人共なるべし。其二雇れ船中一通りの療治をして渡世する医者ニ上手名人ハ無き筈也。世の諺にも馬奴船頭といへバ隨分下劣なる者ニして置くなれば、紅毛とても貴介公子でハなひ筈也。其二附てあるく者なれば、彼地ニ而はやらぬ下手なるべし。それか持參した膏藥油藥を賣ふため、功能を口任せに云ふたを聞書キにして紅毛傳書と号し、神農黃帝周公孔子釈迦如來の如く尊信し、十重百襲金遺（金）玉函に秘藏するハ文盲至極、無念の次第ならずや。第一ニ貴介公子措紳の療治と農夫牧豎奴婢の療治とちかひ有る（〔7オ〕）筈なれ共、隨身して不学、藥方計習ひたる事なれば療治の術ヲ不知故、滅太無生に膏藥を貼也。第二ニハ婦人小兒の療治ニ違有る筈也。愚老か見たる紅毛傳書共に其分ケヲ書たるを見。第三ニハ眼科口科

の事不委。少シ計畫キたるも半分餘ハ唐流也。其外一々二言かたし。委しき紅毛傳書、江戸京ニハ有へけれ共、田舎ニハなし。故ニ愚老ハ不信向ニ存ル也。天正以前に毛利第八、中條帶刀がごときの大器量の医者有りて、蠻国え渡り妙術ヲ傳へ來なハ、日本の重寶となる事もあるへかりしに、那蘇宗の禍より〔7ウ〕御制禁にて渡海する事成らぬ事なり。

嚴命有りて紅毛の医者を被 召呼、日本の儒医ニ被 仰付、彼地の医書ヲ翻譯したらバ正真の紅毛流か成就すへけれ共、是も今ハならざる事成るべし。不及是非ニ、唐流外科を建立するより外の事なし。其唐流も邊鄙にてすれば射利の爲ニするとて、悪姓な医者共か誹謗する故、是もならず。願人流にて朽果るより外ハなし。江戸えも二十五年も出されバ、今の風ハ如何様なるかしらず。知音の人々ハ皆泉客となりぬ。聞ニヤ〔8オ〕るべき所もなし。責而貳拾年に此了簡か出キたらハ、江戸え出、廣く吟味ヲ盡なハ紅毛流か出來共、唐流外科成り共建立する事成るへきに、日暮途遠し。如何共せん様なし。耳目ハ遠し、行歩ハ不自由なり。何方えも可往様なし。殘念いふ計なし。弱年の子共成長の後江戸え出したらハ、此物語の趣ヲ以愚老が志ヲ繼ぐ様ニ勤學教導願入存候旨、松臺え此通委御傳達頼入候。いろく取集メ長キ咄ニ候間、失念なき様ニ、形見なからと思ひ、愚老が悪筆ニ而認メ候處、落字多く候故、書キ直させ申候。〔8ウ〕明日に死たり共、此趣ヲ以御世話有之候得ば遺恨なく候。依而、遺言も同様ニ存、書付進候。以上。

明和七年江戸え申遣ス

閏六月十八日

衣關甫軒老

副啓、甫軒方え被仰遣候趣、御尤成義ニ被存候。御執心憾入候御事ニ御座候。以上。

(原本行空けなし)

未得芳意候得共、衣關甫軒御尊申候間、以手翰得御意候。弥御平常ニ御暮候哉、承度御座候。然ハ甫軒方え御申越之趣、委曲被申致承知候。御家業御執心〔9オ〕之義、憾心之義ニ御座候。甫軒え被仰遣候趣致開誦、別而御厚志之義ニ存候。不佞業も瘍科ニ而数年心懸、紅毛人も蒙 台命毎年致對話候。然共、紅毛人滞留之間少、委ハ難承糺御座候。先甫軒え御尋之趣、覚候通書付懸御目、又々御尋之趣御座候ハ、御書付可被遣候。覚候義ハ書付進不申候心詰。期後音候。以上。

明和八年

岡田養仙

三月五日

建部清庵様

〔9ウ〕

一紅毛人年々江戸え來候ハ、カビタン、役人、外科〔紅毛メストルト云(右欄外に加筆)〕三人也。御不審ニ内科不見由、紅毛并咬啮吧ニハ内科有之也。内科ヲ、シヨルゼイント云。是ハ長寄表ニハ有之哉、東都え不來。内科ノコト、メストルト心得シモアル也。

一紅毛ニモ内ノ因ニヨツテ療治スル也。腫物ノ内因、因熱因寒因湿下立ル也。其外、癰疽ナトノヲモタチタル腫物ニハ名アレトモ、兎角

建部清庵印

風寒湿ヲ因ニトル也。尤、内七情ニモ因也。サテ内科モアレトモ、中華日本トハ風変ル也。今、諸州ノ人長寄え下リ、外科ヲ学者、東都ニ来リ相識ノ者アレトモ、膏藥煉藥金瘡ノ手段斗リニテ、内因ニカ、リテハ鹵莽也。故、三通ヲ学来ル者多キ也。紅毛ノ手〔10オ〕段、東都ニモ学シモノモ多シ。是、今文明ナル故也。

一紅毛本草之書、古ヨリ有トイヘトモ、近ク不佞見シハ、ト、子イスカ書、委也。シカシ、時珍カ綱目ナトノヤウニ数品集録ノモノニハナキ也。草木ハ菓木、虫魚ハ虫魚、各得手シモノ斗ヲ著シタルモノ也。右ト、子イスカ書ハ其内委ク覺候なり。右藥品主治等ハ紅毛人對話ノ上ナラテハ難分別候。

一紅毛人ノ書、只今ハ多クアリトイヘトモ、外科ノ書ナラハ外科ニ心得アル通詞、多年外科ニツキテ不聞ハ不知也。シカシ近年上手ナル外科、紅毛ヨリ不來也。六七年前來リシ、パウルト、云外科、近年ノ上手也。扱、長寄大小通詞ノ内、外科ヲ心得タル〔10ウ〕者アリトイヘトモ、療治方各別レアリ。長崎ニ只今モ行ル、ハ栗崎流、吉田流ナトヲ学候。其上、近年ノ紅毛人ニ聞シモノ也。近頃、紅毛大通詞吉雄幸左衛門ト云者外科ヲ学、療治ヲホドコス也。江戸えモ数度紅毛ニ付出候テ、不佞モ逢候也。手ギハモアル者也。

一藥品其外、紅毛ノ名違有之由被仰候所、是ハ日本ノ直ニ紅毛人え對話無之ノ失也。不佞伺 台命、十五年紅毛人え對話候処、紅毛モ七州ユえ少々宛ノ違アレトモ、各別ノ相違ハ無之候也。

一崎陽紅毛人居処ハ出嶋ト、トナヘ申候。是ニハ紅毛人数多居候得共、

江戸え來ルハ、カビタン、役人、外科三人也。是等ハ何レモ〔11オ〕心得アル者也。三人之内 上えノ拜禮ハ、カビタン一人也。如仰、東都ニ三年モ滞留候ハ、紅毛ノ事凡ハ通可申候ヘトモ、江戸旅館滞留ワツカユヘ、トクトハ對話難成候。

岡田養仙様

右御番御醫師也

一筆致啓上候。養仙様倍御機嫌能被成御座恐悅至極奉存候。然ハ去年中、衣關甫軒え付属仕候愚昧之書付入尊覽候ニ付、不存寄尊書被成下、数年疑罷在候事共委曲御示教被成下、猶又疑惑之事共追々奉候様被仰下、難有仕合〔11ウ〕奉存候。右御禮申上候。貴様方迄如斯御座候。御序ヲ以、何分宜様御執成奉頼候。恐惶謹言。

明和八年

建部清庵

三月廿八日

由清書判

岡田養仙様

御弟子様中

(原本行空けなし)

明和九年十一月江戸え申遣

酒井修理太夫様御家中医師

杉田玄白

翻譯解體新書の作者也。返答左之通。

〔12オ〕

清庵建部先生、和蘭外科者流御不審逐一拜見仕、誠以奉感心候。天涯相隔、御一面識ニモ無御座候得共、實ニ吾等之知己千歳之遇と奉

存候故、存候趣應御不審、左ニ相認申候。

一和蘭人年々江戸え来候條

外科と云ふハ見ゆれと内科と云ふハ不見へとの御不審。是ハ年来日本之俗、和蘭医を都而外科と已称誤来候事と相見へ申候。参り候醫、何も諸科ヲ相兼候。和蘭書所説ヲ以相考候へハ、医と申候者諸科ヲ兼候事と相見へ候。致内話候事ヲ、ゲ子ースミツテレン、致外治候事をへールコンストと申候。

(12ウ)

一和蘭醫といへ共風寒暑湿云々之條。御不審御尤奉存候。前條申候通、風寒暑湿の病并婦人小兒の病、皆膏藥油藥計りニ而も無之、内藥を隨分相用申候。吞藥ダランクと申候。粉藥をパウエルと申候。乍去、国風ニ而唐日本ニ而も下劑ヲ用候所え、スヒユイトと申道具ニ而肛門より藥ヲ入候類の療治御座候。是等は外より致候て、唐日本とハ違候事御座候。鎗持の八助、挾箱の六藏が類長崎え行、歸ると紅毛外科と称らるゝハ迎も藥賣同様の者、論説ハ無御座候。

一和蘭本草の條

(13オ)

是ハ、ト、ミユース(マユ)と申人著候コロイブ(マコ)とて、草木の氣味功能説申候書御座候。形状ヲヘタアンテ、性ヲア、ルド、功能ヲカラクトと申候。其外、金石禽獸ヲ説申候書も、存候方ニ御座候。外題失念。

一醫書渡候哉之御不審

内景ヲ説候書ニハ、

一タアヘルアナトミイ

一ブランカアルと申人所著の書

一カスパルと申人著候書

(13ウ)

右之數、是まで見當り候計七通。

内療之書ニハ、

一マタロス

一アンブル是ハ千金方之條ニ部ニ諸科内景説有之候

方書ニハ、

一アポテーキ

一シカツトカームル

一ホイスホーウデル

外科書ニハ、

一ヘイストルシルゼイン

(14オ)

右之數、夥敷御座候。凡三十部程見當候。悉外題記不申候。

一日本ニ和蘭外書傳書數多有之云々の條。御不審御尤ニ奉存。皆紅毛方の膏藥油藥ニ唐の外科書の論説を加へ著述致候者ニ御座候。漸、檜林榮哲(アツ)之著述金瘡之書、近來京師の伊良子氏外科訓蒙圖彙と外題し、作者の名を隠し板本ニ出候。是、右ニ申候アンブルの金瘡部計少々和解したる書なり。乍去、其内ニ少々、ハ自分の用覚し事加へたり。全く和蘭書和解と難申候。乍去、先ケ之位紅毛の事に通候人、是(14ウ)まで見當り不申候。然シ、今檜林流と唱申候人の療治并仕懸の書と申候類、世間并の紅毛医者にて、御説之通正真の紅毛流と申べからず。

一紅毛文字ハ日本のいろは同然の條

御不審の通、紅毛國字ハ日本のいろはの通り音計ニ而一字の義ハ無之候。其文字廿五、一二三の数字九ツ、合て惣数三十四有之候。書體ハ、ドリクテレッツキ杯とて數體御座候得共、惣数ニ違無御座候。扱、其文字を并へ一語を認候事をスヘルドと申候。日本の假名つかへと同じ事にて御座候。文字を覚〔15オ〕候而も、言葉書ゆへ言葉ニ通し不申ハ分り申間數の御不審、御尤ニ御座候。是ハ先通詞ニ從ひ、日用の言葉を書習、云イ習。扱、和蘭書ニ節用集のことき書有之候。マアリン杯と申人の著申候ヲウルドフウクと申類の書多御座候。是ニよりて一語ツ、ひろひ讀の様ニ氣を盡し、年月を重候得は自然と言葉數を覚へ讀馴、風俗事體も相知レ申候。扱、其書ハ何の爲に澤山有之哉と御不審も可有御座候。是ハ、ケ之國は諸國へ渡海し交易を第一に致し候国風故、譬拂卵察、意太里亜等の国々の言葉〔15ウ〕書キ夫を覚え、覚え申候ために和蘭国語ニ而註釈を致し候書也。其註釈を、兼て通詞ニ習ひ言葉ニ而讀合考合候へハ、次第く々に相分申候。又、言葉ニ雅俗并方言等も可有との御不審、御尤ニ奉存候。御不審之通、珞瑪寶杯の著候万国圖ニも有之通、世界ヲ四ツニ分チ、一ヲ亜齊亜、二ヲ亜弗利加、三ヲ歐羅巴、四ヲ亜墨利加と申候。日本、唐、朝鮮、琉球等ハ亜齊亜の内也。夫故、言葉ハ別に候得共、文字ハ同文也。漢文ニ書候得は亜齊亜の中ハ大凡通申候。和蘭、弗卵察、意太里亜杯ハ歐羅巴の内也。其歐羅巴ヲ通候言葉ヲ、ラテインと申候。是、雅言の類なり。〔16オ〕是に註ヲ致候書も御座候。又、ケ之國之風俗ニ而、醫書杯ニハ皆先ラテイ

ンにて本文を書、直ニ其下へ國語にて其譯ヲ致有之候。夫故、雅俗ハ能分り申候。

一是迄日本ニ傳來候和蘭流外科書、藥名一樣ニ無之由。御不審御尤ニ奉存候。是も只今まで紅毛流の外科、紅毛学ニ文盲故、ラテインも國語も無其分チ、聞ニ任て書たるもの故、一向言葉ハたわひ無御座候。其上、日本の假名ニ而何の氣もなく紅毛語ヲ書候事ゆへ、音韻杯ハ相分り不申、犬の糞も焼味噌も一ツに相成申候。譬焼酎の事、紅毛字にて書候得ハ brandwijn、〔16ウ〕假名書に致候へハ、ブランドウエインとウエの二字ヲ一つに寄て書候得ハ自然と音韻相分り申候。扱又、ケ之國ハ言葉少ニ而、薪の事ヲ brandhout、假名ニ直せハ、ブランドホウト。又、火事の事ヲ brandhuis、假名ニ書ハブランドヒュ井スと書申候。ブランドとハ焼る事、ウエインとハ酒の事、ホウトとハ材の事、ヒュ井スとハ家の事。ケ様之趣ニ而、推テ言葉の分候事御照察可被成候。扱又、只今傳來候紅毛方書キたわひ無之御座候と申ハ、譬ウニコウルヲ前條ニ申候ラテイン語にてハ、ユニコリュニスと申候。紅毛国語ニ而ハ、エーンホウルンと申候。夫を只今迄〔17オ〕傳來ユニコリュニスと書べきをウニカウル、又ハ、ウンコウル杯と誤書來候。ケ様之類にて御推察可被成候。一日本ニ傳來候和蘭外科と呼候人、紅毛の醫書ヲ不傳授、只家々ニ秘し家傳と号し膏藥油藥計りを用ひ覚て、三階松、三星同然ニ膏藥計貼廻し、不学文盲から内医の指圖計を受、自然と手下の様ニなり行候事、残念ニ思召候旨、御尤至極也。私杯も年來御同志ニ御座候故、

迎も紅毛学ハ不知事、唐流の外科と存、彼是唐の外科書ヲのぞき見申候所、何の書も見所少ク、却て外より之（〔17ウ〕）療治方ハ今云紅毛外科者流の方勝レ候様ニ存候。全體、周の頃まで醫道盛ニて瘍醫疾醫と相分候處、世々の戦国を経、有志者士一國の主ニも可成と心懸、醫者杯ニハ成人なく、病身者不用立か醫者ニ成、詰る所ハ道家ニ混し内外医道大ニ衰微し、別て外科ハきたなき業故猶更為人なく、内醫のかた手わざに成、唐の外科ハ絶候同然の事と奉存候。

漸、宋元の頃より一家を唱へ、千金外臺杯ニとり付て外科ヲ建立したるもの故、内治計主ニして外よりのわざハ下手ニ成り候かと被存候。それのミならず、（〔18オ〕）唐人のくせとして滅太無生ニ名ヲ増シ病門を分ケ候故、療治の規矩立不申候様被存候。乍去、内の事ハ唐程精ハなし。幸、日本えハ紅毛の膏藥油藥外治之術も少々ハ傳り候事故、夫を譯文ニし、家々の秘方覚候分を打明ケ、内ハ唐の書ニより、又日本の妙藥ともを一ツニして、日本一流の外科建立可致と弱年の頃より心懸、病門もなるたけ簡約ニして、根太、腫物、吹出物と云ふ古き言葉の意ニ而部を分ケ、乍不及唐人までも日本流の外科為致可申と、著述草稿七八巻も出来仕候。（〔18ウ〕）

第一巻之卷首之趣意

諸瘡瘍許多也。而癰疽存十之七八也。夫、如發脇發臂者曰脇癰臂癰、發腦發腕者曰腦疽腕疽也。且、千金曰癰疽發十指也。而發背、其尤者也。瘍醫之業莫大焉。歷代名家癰疽則分發背為一條、或庸醫輩惟以發背名癰。若疽而已也。均是生一體之瘡腫而陰陽輕重之分也。何

異而治之孫一奎先我曰五發疽通治、又陳實功獨言癰疽發背之治耳。蓋取仲景立方於傷而、雜病皆準焉。某私淑而効之輩易簡而使從吾遊者易知易行也。（〔19オ〕）

集驗方曰癰疽之名雖有二十餘證、而其要有二。陰陽而已。

以下略之。ケ様ニ仕、古人の書一言半句ニ而も心ニ徹候計拔集、治方ヲ付、病の變化ニ從ひ術も付申候。擬々五十年ニして四十九年の非を知るとやら、二三年前、風と前條申候タアヘルアナトミイと申内景の書手ニ入、圖計を見申候處、肺の形、脊骨數違御座候故不審ニ存、刑人を拝願、屍を剖見申候へは臟腑骨節華人の所説大異ニ御座候。紅毛圖ニ合候へハ、誠ニ鏡ニかけ候様ニ寸分違無御座候。依之大憤排仕、幸與平公御醫師内医ニ而前野良澤と申仁、先達而長崎え被參、通詞ニ（〔19ウ〕）從ひ紅毛学ヲ好被申候故此人ニ從ひ、又同藩中川淳菴と申候者、本道醫ニ而物産を好、是又紅毛産物ニ志有之候間、相共ニ右良澤ヲ盟主ニ致し、字引一冊持て六經を讀たる人ありと承及候故、其存念ヲ学ひ、打寄致吟味候所、実ニ不味は心とやらニ而次第ニ相分り、猶又著述（註）に吟味いたし度、骨ハこつか原杯ニ有之候枯骨ヲ尋、内景ハ死者生者の分チも可有御座、紅毛書ニも有之候間、生ながら禽獸をも剖見申候所、紅毛人所説益相分り申候。内は華人精と存候處大違ニ而、却而甚疎く御座候。譬華人の説、天に日月あり人に両眼あり（〔20オ〕）と理ハ聞へ候へとも、見ると言ふ分チハ不知。紅毛人所説ニ而ハ、眼と言ふものハ初メに水あり、其次ニ玉あり。又其次ニ玉子の白味のよふ成水あり。物の景す初メ

の水より三段二うつり、遠目鏡を同じ理なり。扱又、舌に骨あり。紅毛語トングベンと言ふ。直に見る所、無相違。依之考候へハ、婦人の乳も肉塊なり、舌も肉塊也。舌ハ自在にして乳ハ不自由也。舌の自在なるハ肉二骨ある故筋拏之。乳は無骨ゆへ筋不能拏。其精、三千年來所未説なり。依て乍不及、如鳩摩羅什、以管見致翻譯、解體新書と申書五冊出来致候。(〔20ウ〕未校合相成申候故上木不申候。近々ニ出来可申候。其約圖致出来候間、入御覽申候。是二而大筋通り御推察可被成候。扱、唐二而も上代ハ委ク見申候事と相見え、今直に割所ニ而考合候へハ、内経杯ハ餘程宜敷所相見え申候。横骨は神氣所使主發舌者也。其外、彼是致符合候事とも有之候。然二、後ハ不詳。張景岳杯よふく魚骨ヲ以脊骨ヲ定メ、横骨杯ニも自己の見ニて註ヲ下し、横骨即喉上之軟骨也、下連心肺故為神氣所使、上連舌本主舉發舌機。又、項骨ヲモ十四經及註語之類、皆項骨約(〔21オ〕)有三椎。又ハ鍼灸聚英、膽經縣鐘穴一名骨、尋摸尖骨者乃是絶骨と。今直ニ割見るときハ項骨七ツ、絶骨ハ紅毛人所説のペイスと申大筋の盡る所ニ而骨ハ無之候。如此類、擧て程數御座候。是等ヲ以相考候へハ、華人ハ肉の上から尋摸て了簡ニ而定メ候ものと相見え申候。ケ様ニ本元の經脉骨度まで致相違候唐の医書、其説其論不被信候。夫故、唐の書精事と存、夫ニ付致建立候日本流外科取建候事相止メ、何卒紅毛正流の醫道建立仕度、急度存立候。先、内景ハ医者之根元故、右之書より翻譯相初メ申候。猶(〔21ウ〕)此上同志者申合逐々致手配、一書ツ、も致翻譯候積申合候。前條申候へイ

ストルシユルセイ^ルンと申外科書致翻譯可申と、近頃より筆ヲ採申候。其外、医方藥物等も段々と手ヲ懸申度心願ニ御座候。乍去、私義當年四十一歳と罷在、殊ニ近来眼病數度相煩、眼力も薄く相成候故、中々生涯ニハ大業遂ケ申候事無覚束奉存候。併、同志之内桂川法眼の御子息并右申候淳菴杯ハ年若の事故、數年之後は和蘭流醫者成熟可仕候。

一紅毛船ニ乘來候医者、世の諺ニ申候馬士船頭の類ニ而、(〔22オ〕)上手の醫者ハ中々被雇參り申間敷のよし、御不審御尤ニ奉存候。乍去、是ハ、ケ之國風俗ニて外國え通候事第一ニ仕候間、此方へ參り申候カビタト^タと申候もの官人ニ而、貴介公子も參り申候事ニ御座候。正保年間參り申候スパルと申醫師杯ハ上手と相見え、ケ之國之書ニも評判相見へ申候。段々、老先生之御不審御心切之段奉驚入候故、此方の存念乍自負不顧、思召申上候。誠ニ書不盡言とやら、何卒御面會仕度と同志之者とも御噂仕候。此趣宜敷被仰達可被下候。以上

(〔22ウ〕)

安永二年

杉田玄白

正月

衣關甫軒様

猶々、私義ハ御存之通繁多故、弟子共ニ清書申付候間、誤字多可有御座候。宜御讀分可被下候候。以上。

一紅毛語ニハ朱引仕候。且又、紅毛字ハ横行ニ御座候間、横ニ直し御覽可被成候。右之趣、宜御通可被下候。以上。

(原本行空けなし)

一筆致啓上候。未得御意候得共、御壯健被成御座奉恭喜候。然ハ衣關甫軒え付属仕候、多年愚味疑難之一冊子、瀆大先生之電囑候所、毎條款密御教誨被下、御翻譯解體新書之内約圖傾恩賜、(23才)始而奉拜見驚入候。至愚老耄之情深御憐察被下、御盛業孜々寸陰御競被成候中、御丁寧なる御示教二而年来空濛二座候處、披浮雲望春天候ことく、誠二以御禮筆頭難盡忝奉存候。早速御礼可申上筈之所、春來餘寒老病指発、曠日寥々、緩罪万々御宥恕被下度候。猶又得望不願御煩勞、左二申上候条御燕居之節往々御教諭可被下候。

一享保年中拙老弱年之頃、為家業出府講習之砌、紅毛醫書桂川様御家二御所持被成候由承及候間、何卒御弟子二罷成、右書拜見仕度、紹介を以御門人(23ウ)衆迄相同候處、其節は弟子御取不被成候由二而願望不相叶候。他二は無之者と心得居候處、三拾部程御覽被成候由、不堪欽羨之至候。左程世上夥數有之書ヲ今年迄不存、真田舍翁二而一生暮居、被仰下候御幣上二而始而題目計承候も、四十餘年之素志ヲ相償、欣抔仕候。

一植林氏翻譯金瘡之書發行之由、是亦被仰下候。始而承知仕候。則弟子共方え相求下候様為申登候。僻遠之地二居候故、此分之事も不知、坎井之蛙ト思召も無據奉存候。

一紅毛文字の解、藥名一樣二無之訳、ラテインも固(24才)語も無其分、狗糞も焼味噌も一ツ二相成候も、義大畧通曉仕候。扱又、中華醫道、周之頃迄盛二候處、世々の戦國を経て内外医道大衰微し、

外科は絶候同然二而、宋元の頃より一家を唱候得共、唐人の癖に名

を増し病門を分候故、療治の矩規不立と被仰下候条、條理甚分明、先人未發之確論、医門に有志之仁人誰によらず省悟感服不致人は有之間數候。前無古人御監識、日本一流外科御建立被思召立、御著述御艸稿七八卷出来之由、病門御立被成候様、卷首之御趣意御文章數行拜見、(24ウ)畧梗概を得意仕候。御妙齡より之御壮志、毎事奉驚候。此書脱稿之日は紅毛流無と申共、事不闕義と奉存候。然るに、又別段御發明之上、最後二此書も可被廢思召二相聞候得共、先此書拜見仕度義二御座候。拙老義も世間並之紅毛流不信二存、壯年之頃より諸家秘置候傳書を色々手を入借候而、十四五部見候處、多分膏藥油藥計二而、致歴覽に隨ひ不信向二成、漸四十餘歳之頃より唐流を建立仕度と相企候得共、生得不才二而埒明不申。其上邊鄙二而は難成事不及是非、一生願人流二而暮(25才)申候。尊論之通、唐流は内藥計を主にして、外治の術拙く氣之毒二御座候得共、内の事ハ唐流隨分精と今日迄も存居候所、先生紅毛内景の書御覽被成、御不審二思召、刑人屍を割せ御覽候得ハ、紅毛人の所圖毫厘之違無之、華人之圖説は却而大差異二御座候故、紅毛人の所説甚精密なるに付而被思召立、解體新書御述作之由、逐一明細御示教被成候趣、節、擊股膺仕、古今無雙真大豪傑、不待文王して興ると申は先生之事を可申候。御惠與被下候約圖拜見、不覺狂呼、口吐而不合、舌擧而不下、瞠若たる(25ウ)老眸頻二感泣仕候。紅毛人日本え來し始ハ不知、二三年前後の事にもやあるらん。夫より只今迄、彼地の

醫書翻譯する程の人なき事ハ有間敷候。今頃ハ翻譯の書有るべしと居恒弟等に語り聞せ居候所、拙老億度に不違、果して大先生在せり。拙老之歎、昔盲頓開、跛躄忽起候ことくに御座候。三十年來同業之人ニ每會及此論候得共、聾瘵之類計ニ而不及是非之沙汰、切齒搔痒氣之毒ニ存罷在候所、天良縁を假し幸逢伯樂之一顧、冀北老馬蹀躞長鳴之時を得候事、誠ニ〔26オ〕千載の一奇遇と奉存候。鳩摩羅什、僅に佛經を翻譯し始めしより、釋氏の道中華は不及申日本迄被行、佛道の繁昌、今の盛なるを以て相考候得ハ、紅毛醫術も漢文通する国々、御不教之亜齊亜の内ハ不殘被行、御恩沢を蒙むる者、萬々億兆不盡無窮之御仁恵、天下の大幸と奉存候。御年齡當四十一歳ニ御成被成候由、扱々御頼母數、鄙俗の諺に四十八人の三四月と申候。殊ニ御月志之御方様御靈惠過人、春秋ニ御富被成候上は御大業近年に御成就可被成、為生民至祝仕候。拙老〔26ウ〕兼々願人流を大息仕候所、此御盛挙ニ而正真紅毛流外科の一家立、本尊有り宗旨あり、先生ハ則開闢唱導の大祖師也。宗旨なしの願人流を逃れ、施治場中に横行獨歩可致事、拙老多年之志願相叶、不堪其喜雀躍仕候。是耳ならず、内景の御詳説ニ至りてハ、周李已來妄説之糟粕をくらひ、餘涎をなめ候唐流の迂遠なる術御一覽之上、紅毛之簡易緊要なる捷徑を導賜ハ、億兆の国々億兆の生民免天札、躋壽域申さん事、羅什に御比擬被成候得共、三藏法師譯語之功計ニ無之、外科一家の祖師と申ニ無之、〔27オ〕直ニ大慈大悲之佛菩薩と可申候。只所恨候は、拙老暮景虞淵に春き當六十二歳、加之多病、御大業御成就

迄存命難計。歌伏粹唾壺計ニ御座候。御憐察可被下候。

一 正保年間參候カスバルと申醫者、上手之由。内景の書にも同人作有之と被仰下候ニ而感悟仕候。カスバル傳と申書をも見申候所、四卷之内ニ二卷ハ例之膏藥油藥、二卷病論治方ニ候。専外科正宗に倣ひて病論病門を立、人面瘡の療治迄御座候。内治の方ハ無之、只膏藥油藥ヲ〔27ウ〕外より施候事計ニ御座候。甚不信向成物ニ候故、彼ノ下手医者之口任せを聞書して、正宗ニ而一軀を仕立たる者と存居候。其頃は通詞も今の榊林、吉雄などのごとくにはなかりしにや。日本醫の文盲故、紅毛の上手迄を下手に仕立候ハ寃成事ニ御座候。

一 荻野氏著述の刺絡篇、紅毛針法妙術と見申候所、惜哉蠻名ヲ真名に書き、かなを付け、其間え漢名を註候故、重譯煩しく、其要難見候。漢名計ニ而蠻名ハ悉く卷末に集め、翻譯名義集の様ニ致候ハ、針法妙術見易く便利なるへく候。蠻名なくて〔28オ〕不叶わけあらバ、かな書可然候。亜の字え亞と付たる類、かな磨滅致候ハ、差別有間敷候。かなハ和国の文字ニ候間、和字に譯するハ可なるへし。真名は無用之長物、蛇足之類と奉存候。扱又、シカツテカムルプツクを西書と翻譯致候も蠻語ハ不存候得共、何とやら泛然たる書名と奉存候。

一金瘡跌撲之書と申一卷致所持候。西毛医書の圖を写、夫え口授を聞書にしたるものと見申候。然共、藥名かなニツをひとつに寄せ書たる所見へ不申候間、定而音韻相分り申間敷候。拙老か輩、ラティン〔28ウ〕も国語も其わけを不知候故、狗糞も焼味噌も見分け可申

様無之候而、無覺束奉存候。金瘡の術は見ゆれとも整骨の法はなし。尤、内藥の方も無之候間、紅毛醫書を和解したる物にハ無之と被存候。乍去、圖は極而紅毛医書より写候と見得申候。何と申書之圖に御座候哉、右之書に人身にセイヌンと言ふ經七十四有り。孫絡は幾千萬といふ數不知と御座候。是又、漢名何と申經二御座候哉、御覽被下度為指登申候。乍御面當、直二此書え御書入被下度候。藥名かなの誤り、漢名の違等、御直二被下度奉頼候。〔29オ〕

一 山脇氏刑屍を剖見て藏志を著し、紅毛人の圖ハ違ことなく華人の説ハ妄なる事を論し立、九藏之目、引尚書周禮及禦寇章昭等之語、以證之、排素難候處、佐野氏はを非議して片意地なる論を出しぬれば、衆人皆是をよろこひ、山脇氏の功空くなり候。凡近年、藥撰出れば非藥撰を出し、醫断出れば斥医断を出候得共、天下の公論にあらず。各私説を主張せん為に先輩を誹謗し、我意闕諍之論止時なく、醫道の乱と奉存候。況日本は勿論、成周已來廢絶之医道御興復可被成、一家ヲ御立被成候義、衆愚譁々、燦金銷骨之御用心。〔29ウ〕乍慮外千萬、此處隨分被運御賢慮候様二と奉存候。何卒一度御會面、齒牙之餘論拜聴仕度候得共、是ハ定而相成間敷、残念ニ奉存候。口惜きものは年に而御座候。解體新書ハ近々御開板被成候由。拜見可仕、折角相待大悦仕候。ヘイストルシユルゼイン御成就迄は存命難計候。御出来次第、四五枚成共存命中拜見仕度念願仕候。申上度事千萬ニ御座候得共、兼々惡筆不文、老年ニ罷成冗長成造語作字に堪不申、他筆を以申上候。恐惶謹言。〔30オ〕

安永二年

四月九日

杉田玄白様

參人々御中

建部清庵

由清書判

尚々不珍候得共、當地之産粉式袋進之仕候。聊書中之印迄御座候。扱又拙老義、多年世間並紅毛流二妖化され不學文盲ニ御座候故、かな交りニ相認申上候。以来共二右之段御宥恕可被下候。已上。〔30ウ〕

舊年衣關甫軒子被相達候。從來御疑難之小冊拜讀仕、一二及御答候所、相達候由二而、去ル四月九日之貴翰拜誦仕候。維時寒冷相覚候得共、起居御安寧之旨奉恐喜候。前書中多年御疑惑之義、一々奉感心、乍憚御同志と奉存候故、微意不顧思召申上候處、纏々得過譽、誠以汗顔仕候。自古士君子之所望は千歳之後二而も得知已候事ニ御座候。不佞義、生涯之内、如先生逢鐘子期候事、萬古之大幸と不覚雀躍仕候。乍去厚御賞譽所當覺不申候。

一 前書中申上候、不佞著述外科書御一覽も可被下旨被仰下候得共、中々瀆老先生之電覽候様なる義ニハ無御座候。〔31オ〕誠二覆醫之書殊ニ未定之著述ニ御座候間、此義ハ御用捨可被成候。

一 荻野氏著述刺絡篇、紅毛針法妙術と思召候得共、惜哉蛮名ヲ眞名ニ書、かなを付、其間エ漢名ヲ註し、重譯煩しく思召候由。漢名計ニ而蛮名ハ悉く卷末に集メ翻譯名義集の様ニ致候ハ可宜と、御尤ニ奉存候。併不佞此度之解體新書も色々工夫仕候得共、多華人未說者御

座候。第三篇肝要の者計集候篇御座候。其篇にばかり蛮名を唐音書にして片假名ヲ付申候存寄ニ御座候。是ハ乍不及、運に叶ひ唐迄も渡候ハ其節之爲にと存、唐音書に仕候。日本人に讀せ候ニハ假名ニテ可然奉存候。其外ニ〔31ウ〕も、所により無據所ニハ蛮名ニテ書、其下に註ニ譯語ヲ認申候。扱、譯ハ翻譯、義譯、直譯と三通ニ仕候。譬ハ骨の事ヲ蛮語ベンテレンと申候。直ニ當候故、骨と譯申候。又、カラカベンと申者御座候。是ハ鯨のかぶら骨之様に嫩成骨御座候。此カラカと申言葉、からくこりくくと兎の物を噛候音の様なる事を申候。鮭のひす骨之様なるもの也。漢語嫩骨ト申候字御座候故、嫩骨と義譯仕候。又、飲食腸胃ニ入、其精氣化して液汁と成ル。此液汁、漢語可當者無御座候。夫故、直譯ニ仕、牙意纏ト譯申候。且又、萩野氏シカツテカンムルブツクを西書ト譯候義、泛然たる様ニ〔32オ〕思召候旨、御尤奉存候。是假名マダのニ而、シカツトカメルブウクニ而御座候。シカツトとハ寶の事、カメルとハ室或藏の事、ブウクとハ書の事。寶藏書と申事ニ而御座候。惣躰、萩野マダ氏の譯も不倂存寄ニハ蛮書ハ委様ニハ不被存候。御同志之事故申上候。

一金瘡跌撲の書、御家藏之由ニ而御下し被成、一覽仕候。是、前書中申上候檜林マダ栄哲之著述アンブルと申和蘭書和解ニ御座候。金瘡之術は見ゆれど整骨の法ハなく、尤内藥之方も無之と被仰下候。紅毛全書ニハ其術具候得共、右之書ハ古書ニ而言葉も難解、其〔32ウ〕上マダ栄哲之時代迄ハ只今程紅毛之事開ケ不申候故、摘々金瘡之部はか

り漸解候ものと相見え申候。乍去、ケ様なる書の圖ヲ用ひ、セイニウ杯ヲ大切之事と申所、先是迄見當り不申事際ニ御座候。夫故、前書中和解評申上候。併不倂了簡ニ而ハ取所無御座候。全ク和蘭書和解ト難申候と兼而申上候ハ、右之所ニ而御座候。且藥名、かなの誤、漢名の違、委ク申上候様ニ蒙仰候。是又、前書中申上候通故、相分候所も御座候共、逆も十二三ヲ解候而も立不申ニ御座候間、今暫御待可成下候。藥名功能ハ逐々マダ一吟味仕候存念ニ御座候間、相分り次第自是可申上候。〔33オ〕

一右之書中セイヌンと云ふ經七十四あり。孫絡ハ幾千萬ト言ふ數不知ト御座候。是、漢名何ト言ふ經ニ相當り候哉と御尋被下候。全躰和蘭人所立經脉、華人とハ大違ニ而十二經の六經のと申事無御座候。約圖翻譯仕候動脉、血脉、外ニスピイル、セイニウと此四ツより外ハ無御座候。動脉ハ蘭語スラクアデルと云。是、一身血往所の道路也。血脉ハ蘭語ボルアデルと云。血所還の道路也。終身所在絲瓜の糸之ことく錯綜如織。其微細、目の及ふ所にあらず。譬ハ少ク指切り紙ニ而拭ハ、血の出ル所如鍼眼。是、二脉微細の所也。其二脉の大支別處々にあり。表ニ近キ所、能動申候。是、華人所説動脉三部之類也。〔33ウ〕故ニ動脉ト譯申候。又、其動脉微細ノ所より血脉細微の所へ傳申候。其大支ハ所見ノ青脉也。蘭語一名ブルードアデルと言ふ。ブルードとハ血の事也。故に血脉ト譯申候。此血脉中ニハ、カラツプフリースと申候而、如簫簧者御座候。脉辨マダと譯申候。動脉ヨリ傳候血、右ノ脉辨マダに被支放行事ならず、漸々歸心申候。是

一身ヲ養ひ終り歸心申候血故、刺候而其血ヲ瀉申候ニ而害無御座候。刺絡の法に、上を木綿ニ而巻申候得は下より上候血故、青脉起り申候。紅毛脉説に卒厥の人脉の絶候杯、多ハ血脉滿候故動脉行事ならず。夫故、血脉ヲ瀉し候得は動脉進候故、蘓生も仕候事御座候。扱又、血脉の大幹ハ〔34才〕連心申候。其所在ハ脊骨ニ并申候。兩腎亦左右ニ連テ御座候。腎臟ハ水瀉石の様成物ニ而、土器に硯水ヲ入たるごとく、浸し漉れて墨ハあとに残り、水ハ澄て下にしたり申候。腎臟も其よふニ血ヲ澄し、血中の水ヲ分利致シ申候。血中に水ある正據ハ、紙に血ヲ浸セハ血凝り、水ハ廻りニにじミ申候。日々の飲食化して血になり、終身を巡り申候得共、日々増候ばかりニ而ハ相濟不申候。腎臟の働ニ而無用の物ヲ漉し澄シ膀胱に傳、小便ニ漏シ申候。其殘る所の精血ハ歸心、又新に成ル所の血ト共に一身ヲ巡り申候。都而血中の水、動血ニ脉微細の所より第二番皮の下に附〔34ウ〕著いたし候キリイルと言者下條に説申候に浸ミ、湊理より出るときハ汗となり申候。血中に交り在ルときハ蘭語ウエイと申候。夫故、大暑中杯多汗ノときハ小便少ク御座候。是ハ血中ノ水氣、外に滲候故也。夫故、涙唾杯ト違ヒ汗は臭ク御座候。華人説に、經脉為裏、支而横者為經、絡別者為孫。註證發微曰、其支而横者、即如肺經有列缺、橫行手陽明大腸者、為絡也杯とハ御座候得共、譬足之三陰經悉傳三陽二候事と相見え申候。然故、三陰經ハ皆足の端より起り申候様ニ有之候。若煩テ足踝骨より下脱落したるか、又ハ刀ニ而兩足ヲ切落されたる人、三陰の源ヲ断れ、何ヲ以一身可立哉。孫絡支絡

の名〔35才〕ハ有之候得共、委く相分り不申候。如紅毛人説、動血二脉ハ如糸瓜の糸相交り、一身網ヲ懸たごとく御座候。故、何所ヲ切候而も外ニいくらも傳候所御座候故、一身の血能巡申候。誤りて動脉の大支ヲ傷り候得は、動脉ハ無辨故、血ヲ支候もの無御座、流レ行血故止兼申候。愈穴ヲ傷レハ血不止ト申傳候ハ、此動脉の大支の所ヲ傷候故ニ而御座候。且、返關の脉ハ、右大支の通り筋違候と相見え申候。不佞同藩宮崎甚平と申者、生来三部尺澤共に脉應し不申候。仲景の獸脉と申類ニ而も可有御座哉。是等ハ動脉の支細く、草木の枝根なく鬚根はかり候得とも、棒根丈夫成故不枯と同じ事ニ而、〔35ウ〕脊骨ト并大幹か槌成故不死事と奉存候。扱又、セイヌンと申候はセイヌンニ而ハ無御座、蘭語セイニウ、又ハシン子ン、又セイニウウエンと申候。是ハ右ニ申候動血二脉の會、直ニ頭に連り上り候二脉の大支をセイテリンクシイブウセムと申候。ゼイデリンクシイと申もの兩脇と申氣味、ブウセンと申ハ入込ミと申事。左右管ト譯申候。此管項ヨリ上り、頭骨後の骨縫に従ヒ上り、左右共に頂の直縫に至り一管トなる。鼻根迄至申候。是ヲ、セイケルウエイゼブウセムと申候。セイケルウエイゼとハ鎌の事、頭骨に従ひ曲り、鎌の状に似申候故、鎌管ト譯し申候。〔36才〕左右の管一ツに成候三方行合の所より直に下り候管をヒイルデフウセムと申候。ヒイルとハ四ツと云ふ事。左右の管ヲ一二ト取、眞中ヲ行鎌管ヲ三トし、此管四ツ目ニ當候故、ヒイルの名あり。然共、甚短キ管故、短管ト譯申候。右四管の内、共に血あり、辨あり。此血ハ動血二脉

の至る精血ニ而御座候。夫故、ブランカアルと申人之説に、頭常に温なる事如温泉。此血短管より下り、ペインアツヘルキリイルと申者に連り申候。ペヒン(ペヒン)とハ痛事、アツヘルとハ菓の字に當ル。扱、キリイルと申者、漢語可當者無御座候。夫故、直に機里兒(キリイル)ト譯シ申候。此機里兒と申は華人未説者ニして、(36ウ) 蚤書スボンギウスアクチウと御座候。スボンギウスと申者、和浴水吸又海綿ト申物。貴邦方言何ト申候や、少計入御覽申候。アクチフとハ、ケ様くの様之字ニ當り、似かゝるの意なり。右の海綿様成者、終心處々御座候。ペヒンアツベルキリイルは握ハ痛、梨柿と違、松子楓毬杯の様なる者ニ而、握ハ掌中痛候菓に似申候故、痛菓機里兒ト譯申候。惣鉢、機里兒ト申者、水血分利ヲ主り、皮下ニあるハ汗ヲなし、胃下にあるハ其汁ヲ生シ飲食ヲ化し、腎臟も一種の機里兒にて小便を分利す。此痛菓機里兒ハ頭腦の真中に在て、動血二脉の精血ヨリ唐ニ而云髓液ヲ分利致申候。内經髓海ト(37オ)申も尤ニ御座候。此腦髓、一身主宰の根元ニ而御座候。是より分候大経連鼻者ニツ、連目者六ツ、連面部七竅者ニツ、連兩手者ニツ、連耳者ニツ、連九臟者ニツ、連舌者ニツ、連表之皮者ニツ、下而入脊骨連兩足腹背者六十、左右合而八十御座候。御見せ被成候和解書ニハ七十四と御座候得共、不佞翻譯仕候タアヘルアナトミイニハ八十御座候。和蘭人も古ハ開け不申事御座候哉、少々ツ、之異同ハ御座候。扱、此八十の經、四十ツ、左右二分レ候大経ニ而御座候。其末も亦糸瓜の糸のごとく微細ニ而、一身不殘所、動血脉微細の者ト錯雜仕候。解體新書

第三篇格知篇第二章曰、世奴(セニウ)此(此)其色白而強、其原自腦と脊ヨリ出也。盖、主視聽言動、(37ウ)且知痛痒寒熱、使諸不能動者自在者、以有此経故也。詳見于第八篇。又同篇第二十四章曰、神經汁者成於腦内。盖四支百骸神經所行、皆得之而能全。故名云題縷(テイル)禮(レイ)其(キ)牙私閃(ケイスル)白生氣(此語譯)。見于第八篇。此神經汁、右に申候痛菓機利兒ニ而、精血ヲ漉、此汁を生申候。是、腦髓液也。神經ニ傳送シ八十之大経に傳え、右之通一身の働をいたし申候。唐ニ而云所之神とも可申者故、神經と譯シ申候。此神經入眼、第四番の膜と成主視物、入耳主聽聲音、入舌知五味申候。此神經有病、則失食味申候。口中ニ而多所ハ舌及食道の末、膈中ノ部分ニ多御座候。夫故、誤テ熱キ物ヲ食シ申候は(38オ)先舌ニ熱ヲ覚え、咽中不覺、胸に至熱ヲ覺申候。在一身ハ第二番皮ニ多。夫故、能痛痒寒熱ヲ知申候。扱、骨を纏候膜ニ多し。故ニ刀ニ而切候得は、上の皮と骨の所痛強御座候。ケ様之者ニ御座候故、神經と譯し候而も不害義と奉存候。委細之事ハ第八神經篇ニ詳也。此篇ハ経の行様明細に御座候。逐而開板之上、御覽可被成候。其微細の者、是又目の及所にあらず候。其微細の者、何として知候哉と御不審可有御座候。是ハ、ミコウラスガウビユンと申道貝(ミヤ)ニ而見申候得は能分り申候。此道貝ハ虫目鏡ニ而御座候。夫を段々と目鏡を仕懸、次第ニ写り候様ニ致し、遠目鏡のごとく三段程ニ(38ウ)写し寄く候故、蚤杯も写し見申候得は、大サ二寸程ニ見え、蚤の足の経絡迄能分り申候。ケ様之道貝(ミヤ)ニ而候故、人の経脉ハ猶能分り申候。扱、腦ヨリ神經の續候事ハ有生者、禽獸ニ而

も同シ事に御座候。試に胤二而も御剖御覽可被成候。皆面部七竅二連り居申候。華人の説二而は心は藏神と御座候得共、蘭人の説二而ハ心は順血の元、脳は神氣之元ト被存候。已に蘭人中風之説ハ中風者神經之病也。神經病故不遂不仁仕候。然とも動血二脉ハ無恙候故脉も應シ、切ハ血も出申候。如華人之説、水行于天地、猶血氣行于人身也。然ハ氣血ハ経脉之内ヲ流行すると見えたり。然二風邪乘虚〔39オ〕入及其中也、有中腑中臟中血脈氣虚血虚之不同ト。然ハ血虚セハ脉モ不應筈也。氣虚セハ脉行力なき筈也。血行無恙正據は脉ハ髓也。又世醫之説の如ク、氣血不順ト云ハ不遂の方ハ腐候筈なり。血は主養一身候故、腐も致不申候。脉も應し申候。神經の病故痛痒寒熱を覚不申候。是等二而神經の働き御照察可被成候。猶、御不審も御座候ハ、被仰知可被下候。

一此度翻譯仕候解體新書之義、是まで紅毛書和解等ハ少々見當り申候得共、急度翻譯と申事、只今迄見當り不申候。乍去及自我作古之業に御座候間、萬事譯法も新製に仕候。勿論浮圖氏譯法も有御座候得共、是ハ一向学候義無御座候。〔39ウ〕翻譯、義譯、直譯と三等に仕候義ハ前條申上候通ニ御座候。扱又、漢字當様は假唐二而三部人迎等を動脉と御座候故、血所往者ヲ動脉と譯し申候。血の所還者も青脉杯ト御座候故、對動脉血脉と譯し申候。且又、経脉と熟候ときハ一ツ様ニ相聞え候へ共、十二経脉ヲ一ツ、云へハ何経と云て何脉と云ず。元ヨリ一身最成者故、動血脉と相分り候様にセイニウに經之字を下シ申候。又、何之大筋の前後杯と御座候大筋ハ、蘭人所

説ベイヌと申者二而、スヒイルと云ふ者の根なり。此ヒスイルと申ハ山脇氏藏志に、筋ハ其末肉と成り候様ニ有之候得共、肉の間ニ交り在て筋膜共ニ可申者御座候。元来一物故、筋と譯し申候。大抵新〔40オ〕書之譯、是等之趣ニ仕候。御同志之事に御座候間、一通申上候。若、思召も御座候ハ、御示教可被下候。

一凡近来、非臆志、非藥撰、斥醫断杯逐々に出、私説ヲ主張せん為先輩を誹謗し、醫道の乱と相成候様に思召候旨、御尤至極ニ奉存候。扱々淺猿しき世態、小兒の戯同前、君子の可取事に御座候。右躰之世風故、解體新書開板之上、衆愚譁々、燦金銷骨之用心可仕旨、御心切難有感泣仕候。迎も按劔之人は多可有御座候。乍去、一番鏈を入候にハ鏈玉に上り候存寄に無之は相成敷候。併一人なり共、鏈付候ハ本望之至ニ御座候。陳勝〔40ウ〕は事不成候得共、高祖二而秦の苛政ハ改り申候。然ハ勝か志も立申候。我醫も如右、一度着実の論を唱候は、又千載の誤も改り候時節可有御座と存候計御座候。申上度事如林候得共筆紙ニ難盡、先御答旁如此ニ御座候。恐惶謹言。

安永二年十一月八日來ル

杉田玄白

十月十五日

翼（花押）

建部清庵様

猶々御丁寧之御端書不淺仕合ニ奉存候。疾ニも御返事可申上處、當夏中寡君病氣ニ而不得手透、其後私義も〔41オ〕新婚仕、妹も外え嫁、彼是俗事紛冗ニ而乍存延引、多罪御高免可被下候。且、先達而は貴邦名産御投與被下、千萬忝奉存候。自是も此品乍輕少進上仕

候。猶後便可申上候。今以俗事多、以他筆申上候。此段御免可被下候。以上。

又申上候。先達而被遣候御書物、先返上仕候。以上。

追而申上候。初より御往返之御書翰、蘭学開候為ニも宜可有御座候間、開板も仕候様ニと強而勸候者御座候。如何可仕哉、思召も無御座候ハ、私義も右存寄ニ從ひ可申哉とも奉存候。先御内談申上候。以上。

(41ウ)

玄白

十月十五日

清庵様

安永三申午年

蘭學衆中

築地甫菴改 桂川甫周 年二十一

奥平大膳大夫内 前野良澤 年五十五

酒井修理大夫内 中川淳菴 年三十五 只今蘭本草ト、ニュース翻譯 (42オ)

酒井修理大夫内 杉田玄白 年四十二 ヘイストルシユセイン^(マ)解體新書作ル

深川佐賀早二住 石川元常 年二十三

築地 本田留之助 年二十三

籠甲 尾張屋藤七 年三十八 此人ナグサミ蘭學致候

(42ウ)

『瘍醫問答』

武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵される広瀬周伯自筆『廣瀬周伯筆記』三冊（請求番号「乾七〇六」）のうち第三冊が『瘍醫問答』である。

茶緑色の表紙、四針眼。縦二六〇×横一七〇ミリ。題簽は無く、表紙には何も記されず藤浪剛一の「乾々齋書屋」蔵書票を貼付する。

下小口書は「瘍醫問答」。巻頭に「廣瀬之印」（二三×二三ミリ）の朱文印をおす。内題は「瘍醫問答」。全四七丁。全丁無枠無界線の楮紙。

表丁は十行どり、裏丁は九行どりで筆写される。以下から成る。①邨

山有成撰「瘍醫問答序」（二丁）、②安永庚子（＝安永九年）春二月大

槻玄澤撰「瘍醫問答序」（二丁）、③本文全四四丁。本文末（第四七丁

裏）から少し余白を取って「門人周伯寫本」と誌す。これは周伯が玄

白の天真樓門人であったことをいう。①を撰した邨山有成は初期の蘭

方医として玄白の有力な門人と推定するが、経歴等は不明。①②の序

および本文には朱で読点が付される。

因に、第一冊（四〇丁）は「文稿」の下小口書があり、周伯が折々に書いた文章や詩を収める。巻頭に朱文印「廣瀬之印」をおす。版心に「環堵室」と刷る用箋を用いる。環堵室は周伯の書斎号か。

第二冊（三七丁）は司馬江漢『和蘭天説』の筆写である。巻頭に「廣瀬之印」の朱文印をおす。巻頭の右上および右下、巻末の左上および左下に「紫園」（二五×一一ミリ）の黒印をおす（紫園は周伯の号）。無枠無界線の楮紙。巻末の遊び紙に「門人周伯寫」と誌してお

り、周伯が江漢の門人でもあったことがわかる。

* * * * *

瘍醫問答序

夫有翼者飛揚、有蹄者流行、各有所長而不能相兼也、於事業技術亦然、苟取其所長而用之、其為功也鉅矣、蘭人治瘍益天下之長也、學而施之我者、亦已尚矣、然而殊方異言、學者纒得之象胥氏、未有能盡彼所以長天下者、雖或傳其書、不啻鳥跡科斗、亦未如之何、徒陳諸文房、供奇觀耳、若狹待醫杉田先生、豪傑之士也、憤然謂豈有人之所書而不可讀者乎、乃與一二同志、講習討論、推其所已知、以通之其所未知、熟而玩之、竟能極彼所長、而試之我、無不如意（一才）者、於是乎從游之徒、負笈裹糧、嚮至輻湊、先生先示之、以其所嘗與奧之醫官建部翁、往復論辨之書牘數篇、欲使其知其所由而入也、余侄孫信古、亦幸受業先生之門、以故余亦得閱之、嗚呼蘭人來貢、於今二百餘歲、能取其所長而用之者、獨在先生、其有功於生人、可謂鉅矣、問門人刻其書牘於塾中、余喜是舉、以叙是言云、

東都 邨山有成 撰

（一ウ）

瘍醫問答序

余小少從清菴先生遊、先生有疑我瘍醫事者、十數年于茲矣、奧羽之間

莫有能獲其解者也、曩塾生關伯龍、學業於東都渡部蕃主法眼、中間歸國焉、迺言東都人物淵藪、中有首唱唱蘭醫學者、先生驟然而起曰、有是哉時乎、昇平百有餘年、文明光被四表、輦轂之下、豈無崛起之士也乎、遂錄其疑問數條、記諸伯龍焉、及伯龍再遊東都、學藤子效等俱質之諸名家、而其說或略或贅、漫然不得其要領、未足以償先生之素志矣不得三載、偶見鶴齋先生而質之、鶴齋先生（〔2オ〕）讀之、慨然少選曰、四海而比肩千里同情、其言之相契如是也、夫當吾世而得此人、是吾之鐘子期哉、遂為之詳解明辨、裁答復之、先生累年積疑一旦渙然、其喜可知也、其說具于往復書中、爾來雁魚陸續（續）于今不絕、如通家之好云、初先生得其報也、不堪其喜、壮志勃勃、欲與鶴齋先生周旋、然齒既逾耳順、且舊病增加、不能果其志矣、於是命郎君亮策子、往來東都、受業于鶴齋先生之門、余小子親炙先生、與聞鶴齋先生之余論、竊欽仰久矣、往歲亮策子祇役于東都、余亦從焉、迺介亮（〔2ウ〕）策子謁鶴齋先生、遂留其塾中而受業焉、蓋二先生偉矣、日本支那剖判以來所未嘗有也、嗚蘭人入貢二百有餘歲、其間學者何限、恬不之省、一言不論及者、果何心哉今有清菴先生者、始疑之、又有鶴齋先生解之、可謂千歲之奇遇矣、小子輩得親見此盛事、何幸加之、推其所由、實二先生之書、為其階也、余不敢秘帳中、梓之以傳不朽、此篇也、施于字內、其猶泰山之雲乎、膚寸所合、霏然乎天下矣、豪杰之士、繼踵而興、此道行可跋足而竅也、余姑記二先生奇遇之由、與余之所欽嚮以為序、

安永庚子春二月東奧大概 茂賀玄澤 謹序

（〔3オ〕）

（3ウは墨付なし）

瘍醫問答

一紅毛人年々江戸へ來ルニ外科ト云ハ見ユれとも内科と云ハ不見。紅毛には内科の医者ハなき事なりや。

一紅毛人といへとも風寒暑濕産前後婦人小兒の病ナキ事不能。悉ク膏藥油藥の類計にては療治ならぬ筈なり。然レバ内科無シテハならぬことなるに、日本にて紅毛流と稱する者、皆膏藥油藥の類計にて腫物一ト通りの療治のミすること不審也。長崎奉行へ附テ往キ一ケ年彼地ニ居て販レバ、鎗持の八藏、挾箱の六助も外科ニなりて八安、六齋など、名ヲ付キ、紅毛直傳と稱するハ心得がたきことなり。長崎へ之たりとも、紅毛医者ノ弟子に（〔4オ〕）なり療治をも見習、紅毛の医書をも習ハずにハなるまじ。但シ長崎さへ往ケバなることなりや。

一紅毛本艸有コトハ聞及たれとも、田舎ニてハ見ルことならず。右ノ本艸を見レハ草木の氣味功能共二本艸綱目ナドの様ニ知る、事なりや。

一紅毛医書も多渡りたるや。

右四ヶ條、諸先生へ御尋、委細書付御申越候様頼入存候。久々にての面談、珍敷キ咄も錯雜前後致候間、失念も可有之哉と老年之身の上、再會難期存候故、兼て語申度と思ひ候事共、縷々筆に任せ書綴り、左に申達候。

（〔4ウ〕）

一今日本にて紅毛外科傳書といふ物、八卷書、十二卷書、新傳の六卷書など、名づけ、色々様々の書物夥しく有。外科者流家秘とすれ

ども紅毛醫の著述にあらず。通詞を頼て色々の事を聞書にしたるものと見ゆる也。何ほどの明醫より聞ても、取次をする通詞か素人故、日本人の稟賦と紅毛人之稟賦と不同、其土地の寒暖の違ひ、衣食の異なるをも不知、日本医の問事計を取次で通語してやる事故、紅毛医も我が用ひなれたる計りを口に任せていひしを、筆まめに書きたるが、八卷書、十二卷書、六卷書、其外色々様々の傳書となりたるものなるへし。去ルよつて〔5オ〕どの書ニも同じ事のミ多し。

それを本にして、中華の医書の外科の部から抜キ集メ、病論を集合したるものと見ゆる也。正真の紅毛流といふものにはあらざるへし。一紅毛の文字は日本のいろは同然に、音計にて字義はなきと見ゆれば、たとひ紅毛醫書の文字を能よみても、彼地の風俗事跡を不知は通ずへからず。言葉に雅俗も有べし。時々のはやり言葉も有べし。草木の名も國々村々の称する處違有べし。病名も醫者の称する處と民間の呼とと、古今称呼の違有ル筈なり。〔5ウ〕紅毛流外科、其沙汰なく各家傳と称し、吟味せざる事不審也。愚老、紅毛傳書といふもの拾四五部取集メ見たるに、薬名いろく違有。假令ハ白蠟クワイトをハツキワス、一ニベツテワス、一ニトウルハンアル。乳香をトウセス、一ニトウリス、一ニヨリハヌン、一ニレシイ、一ニウイロク、一ニマステキス、一ニステラスカラメイタ。如此白蠟乳香二薬の名数多あるを以考れば、異名数多有り。國々村里之方言、古今称呼の違、雅名俗称も有べし。外科者流、書を秘し他へ不レ出、誤りをも不正、家傳と号し弘く吟味せざる故、何れ是、何れ非なるや知へか

らす。本来紅毛の医書といふものを傳授せず、膏藥油藥計を習ひて、それにて一流を〔6オ〕建立したる故なるべし。紅毛の医書渡りても文字で埒明ざる事なれば、用に立ざるべし。日本にも鳩摩羅什かごとき人有て佛經を翻譯したることく、紅毛の医書を翻譯して漢字ニしたらバ、正真の紅毛流か出来、唐の書を借らず外科の一家出へし。その外、婦人小兒科杯の妙術も有べし。其正據は、天正年中毛利第八といふ人南蛮へ渡り、彼地に十七年居り、火術鉄炮の妙を傳へ、歸朝之後樅木民部チキと改名し其流を樅木流といふ。種々の妙術名譽をあらハし加州に仕官し、其子樅木又兵衛といふ者、家相續すと〔6ウ〕聞ク。火術鉄炮の極秘傳は弟子井上源治郎と云者傳屬して仙臺に仕官す。その流法同藩に残り、木田多左衛門といふ者傳て、無比類妙術を極む。世に花火といふは根元此火術より出たる由。又それより以前之事にや、年代はしらす、中條帶刀といふ人、是も南蛮へ渡り、婦人科醫術を傳へ来り奇効妙驗有し由。其医術は仙臺に残り、中ノ目道味といふ者の家に傳り、兩人共に日本一家妙術の祖となりたりと聞傳へたり。両流ともに唐の書をからず一家を立たるとぞ。今紅毛流の外科とて、紅毛名乗はずれとも、内々を見れば皆唐の書から拔出して集合附〔7オ〕會したるさま氣之毒千万也。夫故内科の下役の様になり、内科の先え立事ならず。獨り道を行事ならぬ様に成たるハ殘念至極なる事也。唐にて外科といふハ明陳實功、清祁坤か輩、獨歩のありさま書面の通也。古人の語にも、内之症或不及其外、外之症則必根于其内也と有。膏藥油藥計外より貼て

ハ埒明さる事ある故、内薬を用ひさすれば内科ハ腫物の寒熱虚実を見別らぬ故、外科より相談を仕懸ねばならず、それも悪意地なる内医ハ外科の云事を不用、知らぬ事に我意を張り、病人を誤ること多し。(〔7ウ) 不_レ得_レ已_レ、外科内外をすれば利を得るために内外を兼てすると悪ル性な者共が誹謗するを聞ば、凡夫の淺猿しさハ嗔恚のたねとなり、自然と陰徳を破る事也と思ひてせず。外科一家にてせねば能事ハならぬといふ理は知らぬから、只今迄解魔法師や賣主坊主同然にて、神にもあらず佛にもあらず、天台とも見へず真言にもあらず、御幣を振りて真言を咒し、三衣を着して中臣祓を唱へ、半上落下候渡世業にて術を鬻キ一生を暮したるハ残念至極なり。浄土法華の道心坊すら宗旨あり。いかに渡世なればとて、法度の害にて何の宗旨もなく人をまどわし、碩学(〔8オ) 知識の高僧に賣主坊主とて見あなとらるゝを、俗人もちと心得たる人は甚下輩なる者とおもふ也。今の外科も右の躰たらくなり。婦人小兒眼科口科、各一家をなし、内科の指引を得ずして獨り立ちするに、外科計獨道を行れぬは口惜事ならずや。畢竟彼八安六齋などいふ鎗持の俄力成ル俗外科杯か、三階松、三星同然に膏薬油薬はかり覚て、腫物の寒熱虚実を分別せず、滅太無姓に膏薬を貼りありく。一年長崎に居て紅毛人の形勢、船の様子杯遠見したるを味噌に、長崎咄シを賣りて、直傳なり(〔8ウ) といふて紛らかし、療治して居る内に仕合能ければ、諸侯方へ仕官をもすれ共、元来無字故、内科の尻へ附て廻りたるが自然と内科にまわさるゝ様に成たるなるべし。愚老壮年の頃

より此を憂ぬれ共、紅毛醫書を見たる事ハなし。縦令見たりとも翻譯なくしてハ通すべからず。然ハ一向紅毛流を止メにして唐流を建立したきものと思ひぬれとも、自_レ我作_レ古_レほどの意量_ヲはなし。爵々として日月を送りぬ、因て嫡子三省ニ此事を語り聞せ、汝何とそ江戸にて明智の人を尋、此事を計れと命しけるが、短命にて先達而死す。愚老ハ最早_ヨ齡傾_キ氣力も(〔9オ) おとろひ、日用の事さへ物忘れする様也。残る子共は弱年也。如何ともすべき様なし。弟子共等も我死する後なりとも、何とそ此志を継ぎ、一家をなせと教るなり。江戸表にハ廣き事なれば、先達而此道を建立したる人あるか、又紅毛醫書を翻譯したる人あるべし。若左様の書あらば早速見たきもの也。かよふの事は大都會にて高名なる人か唱出さされば成就せぬ事なり。紅毛船日本へ来りし始りは何の時の頃なるや、年代はしられ共、二三百年前後にもや有らん。夫ヨリ今迄之間に紅毛の醫書を翻譯する程の(〔9ウ) 人なき事ハあるまし、然は今頃は翻譯の書ある歟も知らず、邊鄙の地に居ては知れかたく、無念なる事也。偕又紅毛の船にハ人数夥敷乗來由なれとも、船頭より水主楫取の類商人共來るべし。夫に雇れ船中一ト通りの療治をして渡世する医者に、上手名人はなき筈なり。且世の諺ニも、馬奴船頭といひ隨分下劣なる者にして置なれば、紅毛とても貴介公子にハなき筈なり。それに附てあるく者なれば、彼地にてはやらさる下手醫者なるべし。それが持參した膏薬油薬を賣ンため、功能を口任せにいふたるを聞き書して紅毛傳書と号し、趙壁(〔10オ) 隋珠のこたくに秘して金匱

玉函に藏置は、文盲至極無念の次第ならずや。第壹二貴介公子摺紳の稟受の薄キと、農夫野人の稟賦の厚キと療治の違も有筈に、隨身して其道は不_レ学藥方計習ひたる事なれハ療治の術をしらす、滅太無姓に膏藥を貼なり。第二には婦人小兒の療治に違ひ有ル筈也。愚老か見たる紅毛傳書共に其分ケ書たるを不_レ見。第三にハ眼科口腔科の事不_レ委。少シ計書たるもおほくは唐流なり、其外一々に言かたし。くわしき紅毛傳書、江戸京二は有〔10ウ〕べけれども、田舎にハ無し。故に愚老ハ不信仰に存ル也。天正以前にも毛利第八、中條帶刀がこときの、大器量の医者有りて蛮國へ渡り、妙術を傳へ来りなば、日本の重寶となる事も有べかりしに、那蘇宗の禍より、御製禁にて成ラざる也。嚴命有りて紅毛の医者を被 召呼、日本之学力ある人に被 仰付、彼地の医書の翻譯出来たらば、正眞の紅毛流も成就すべけれど、今はこれもならぬ事にやあらん。不及_二是悲_一唐流外科を建立するより外の事なし、其唐流も邊鄙にてすれば利を得ル為にするとして、例之悪ル_{（三）}姓者か誹謗〔11オ〕する故是もならず、解摩法師同然にて朽果る事なるべし。江戸えも二十五年出されば今の風は如何様なるかしらす。知音の人々は皆泉客となりぬ。とひもとむべき處もなし。責て廿年前に此了簡出で、江戸杯へ出、廣く吟味を盡しなば、紅毛流は出来す共唐流外科成共建立する事成べきに、日暮途遠、如何ともせんすへなし。耳目はとおく行歩は不自由なり。何方へ可往様もなく、残念いふはかりなし。弱年の子共等成長の後、江都へ出しなば此物語の趣を以、愚〔11ウ〕老

か志を継キ候様に勤学教導頼入存候旨、伊藤松臺え此通委御傳達頼入存候。色く取あつめ長き咄に候故、失念なきよふに存、形見なから愚老か悪筆にて認候處、落字多く候故書直させ申候。明日に死たり共此趣を以御世話有之候へば、遺恨なく候。依之遺言も同様に存、印章いたし進候。以上、

明和七年

建部清庵

閏六月十八日

衣關甫軒老

〔12オ〕

〔12ウは墨付なし〕

清庵建部先生、和蘭外科者流之義御不審逐一拜見仕候。誠以奉感心候。天涯相隔、御一面識ニも無御座候得共、實ニ吾等之知己千載之遇と奉存候故、存候趣應御不審、左ニ相認申候。

一和蘭人年々江戸へ来り候條

外科と云ふハ見ゆれと内科と云ふは見えすとの御不審、是は年来日本之俗、和蘭醫を外科とのミ称しあやまり来候事と相見へ申候。

參候醫、何も諸科を相兼候。和蘭書所説ヲ以相考候へは、医と申候者ニ諸級を立て、先一術宛之専門〔13オ〕相成、其術悉く熟し、其業全く成候人を上医と定候様に相見得申候。去ルニよつて、業之熟し候人の名、他の物産等之書までも相見へ申候。内治いたし候事を「ヘ子ースコンスト」「上欄書込み」○ヘ子ースヘル ○ヘルメー「ヘル」致、外治候事を「ヘルコンスト」と申候。

一和蘭といへとも風寒暑濕云々之條

御不審御尤ニ奉存候。前條ニ辨し候通、風寒暑濕の病、並婦人小兒之病、皆膏藥ばかりにても無之、内藥を随分相用申候。「上欄書込み…内藥ヲ用ルコトハ「インウエンジケヘ子ースミツテレン」。飲藥を「ダランキ」と申し、粉藥を「プーエル」と申候。其外藥製、唐日本よりは多く（13ウ）御座候。御望ニ御座候ハ、逐而書付入御覽可申候。「上欄書込み…唐にて申ヲ汗吐下三法と相聞へ申候。是ヲ「アリーヤーペンデミツテレン」と申候。三等開塞法ト申事ニ御座候」。乍去、国風ニ而唐日本にて下劑を用候處え、「スポイト」と申器にて肛門より藥を入候療治御座候。此術を「キリストル」と申候。ケ様之儀、外より致候而、唐日本とハ違候事御座候。且、鎗持の八藏、挾箱の六助か類、長崎え行歸候て、阿蘭陀外科と称候類、逆も藥賣リ同様之者、吾輩之論説ニ與り候者ニハ無御座候。

一和蘭本草の條

是ハ「ト、ニユース」と申人著候「コロイトブーク」と申書、並「アブラハム ムユンチンク」と申人著候「ア、ルトゲウワツセン」と（14オ）申類之書、皆草木の氣味功能之説有之候。「上欄書込み…「ウエ井ンマンと申人集候本艸ニ彩色の寫真圖之書御座候」。形状を「ヘダアンテ」、性を「ア、ルド」、機能を「カラクト」と申候。其外、禽獸魚介蟲を説キ申候書に、「ヨンストンス」と申候人著候者有之候。金石を説申候書は「スエイステマタ」と申候。縦令ば、蟲魚之類迄も藏府形状、並功能等も辨有之、其説之細密成る事、本草

綱目杯之及候者にハ無御座候。

一醫書多渡り候哉之御不審

内景ヲ説候書には、（14ウ）

一「ターヘルアナトミ井」一「ブランカール」と申人所著之書
一「カスパル」と申人の著候書「上欄書込み…○コルムス ○プランカールツ ○カスパルユス ○コイテル ○パルヘ井ン何れも人ノ名」
右之類、是迄見當り候計拾式通。

治療之書には、

一「マタロストロースト」是ハ内外科醫書 一「プラキテーキ」是ハ内科の書 一「アンプル」是ハ外科内景説製藥説申候書也 一「アポテーキ」是ハ内外科方藥ノ類 一「シカツトカメル」是ハ製藥並ニ内外醫方藥物之類を説候書なり 一「ホイスポウデレーキ」右ニ同し 一「ヘー

「パルヘ井ン」右ニ同し 「上欄書込み…ワアペンホイス」
右之數、医家に與り候書はかりも夥數御座候。凡三拾部余も見當り申候。悉く外題記不申候。（15オ）

一日本にて和蘭外書傳書數多有之云々の條

御不審御尤ニ奉存。如御不審、皆和蘭方之膏藥油藥に唐の外科の論説を加へ、著述致候者と相見へ申候。漸、楮林流にて取扱候金瘡之書、近來京師之伊良子、外科訓蒙圖彙と外題し、板本ニ出申候は、是右ニ申候「アンプル」と申書の金瘡之部ばかり、少々和解いたし候者ニ御座候。乍去、其内に又例の作者の用覚し事書キ加へ申候。全く和蘭書和解と申がたく候。しかれども、ケ程位和蘭之事に通シ

候書、是迄見當り不申候。然し、今槽林と唱申人〔15ウ〕之療治並仕掛の書と申候類、世間並の和蘭流にて御座候。此類皆一家くの書と申候得は、宜しく候はんなれと、御説の通、正真の和蘭流とは申かたき者かと奉存候。

一和蘭文字ハ日本のいろは同然之條

御不審之通、和蘭國字は日本のいろはの通、音計りにて一字之義は無之候。其文字廿五、壹式三之数字九ツ、合せて総数三拾四有之候。書體は「ドリユク」「テレツキ」杯逆數體御座候得共、惣數ニ違無御座候。扱、其文字を並べ一語を認申候事を、「スペル」と申候。日本之假字つかひと同じことにて御座候。文字を覚候而も、言葉書

故、言葉〔16オ〕に通し不申は分り申間敷之御不審、御尤ニ御座候。是は先和蘭譯家に従ひ、日用の説話を覚ひ、或は是を書習讀習、扱和蘭書ニ字彙のごとき書有之候。「○マーリン」○「ハルマ」○「ハンノツトレ」○「ロケース」杯と申人の著申候○「ウヤール」○「デンプーク」と申書おほく御座候。是によりて一語ツ、工夫をめぐらし氣を盡し、年月を重候得は、自然と言葉数を覚、讀馴、風俗事體も相知レ申候。扱、其書は何の為に沢山有之哉と御不審も可有御座候。是は彼の國は諸國へ渡海し、交易を第一にいたし候國風故、〔16ウ〕假令バ拂卵察。亞爾馬泥亞等の國々の言葉を書き、夫レを覚え申候爲に、和蘭國語にて註釋をいたし候書也。其註釈を、兼て譯家に習候言葉にて合考候得は、次第く々に相分り申候。又、言葉に雅俗并方言等も可有との御不審、御尤奉存候。是は天經惑問杯ニも

有之通、世界を四ツに分ち、一ヲ亞齊亞、二を亞弗利加、三を歐羅巴、四を亞墨利加と申候。日本朝鮮琉球等は亞齊亞の内ナリ。夫故、言葉ハ別に候得共、文は同文なり。漢文に書候得は、亞齊亞の内大凡通申候。和蘭、弗卵察、亞爾馬泥亞杯は歐羅巴の内なり。其歐羅巴を通候言葉を「ラテイン」〔17オ〕と申候。是ハ彼方の雅言の類なり。是は「ホールラテウヤールデンプク」と申候書にて穿議いたし候得は相分り申候。又、彼ノ國の風俗にて、醫書杯には皆先「ラテイン」にて本名を書キ、直ニ其下え國語にて其訳をいたし有之候。夫ゆへ雅俗も能分り申候。其外人組候言葉をば「ウヤールドシカット」杯と申書にて見候へは能分り申候。

一是まで日本に傳來候和蘭流外科書、藥名一樣に無之由、御不審御尤に奉存候。是も只今迄和蘭流之外科、和蘭學に文盲故ラテインも國語も〔17ウ〕其分ちなく、聞にまかせて書たるもの故、一向其言葉分明に無御座候。其上、日本の俗名にて何の氣もなく和蘭語を書候事故、音韻杯ハ相分り不申候。日本の外は何の國にても二合三合半渴〔上欄書込み〕渴字當作濁字〕等之韻之言葉多ク御座候。漸、日本にて合羽、土鼈などの類、百に壹ツハ有り、兼々彼國のこと葉は大イに違ひ候事故、言ひよふしたゝめ方にて人歩も物食ふ匙も一ツに相成申候。假令ハ燒酎の事、和蘭字にて書候得は Brand Wine の由、「上欄書込み」蘭字中ル字ニ様アリテ、其称呼別ニス。人部食匙ノ二語共ニ呼テ「ホルク」ト云。只其ル音呼法ニ依テ、是ヲ分ツ故ニ容易ニ辨ガタシ。動モスレバ混ズルコトアリ。國字書

ニ致候へは「ブランドウエ井ン」とウエの二字を一ツに寄せて書候得は自然と音韻相分り申候。扱又、彼ノ国は言葉朴にして、薪の事を（18オ）Brandhour、國字ニ書は「ブランドホウト」。又、火事の事を Branchuis、國字ニ書バ「ブランドホイス」と書申候。ブランドとは焼る事、「ウエ井ン」とハ酒の事、「ホウト」とハ材の事、「ホイス」とハ家の事。ケ様之趣にて推て言葉の分り候事御昭察可被成候。扱又、傳來候和蘭藥名不分明ニ御座候と申ハ、假令バ「ウニコウル」ヲ前條ニ説申「ラディン」語にてハ、「ウニコリユニス」と申候。和蘭國語にては「エーンホールン」と申候。夫を只今迄傳來に「ウニコリユニス」と可レ書を「ウニコウル」、又は「ウンコール」杯とあやまり書來り候。ケ様之類にて御推察可被成候。（18ウ）

一當世にて和蘭外科と呼候俗医者共、本來和蘭の医書を不傳授、只聞書を傳書と稱し、己か家々に秘し、家傳と号して、膏藥ヲ貼廻し、不学文盲より内医の差圖計をうけ、自然と下手の様ニなり行事、残念思召候旨、御尤至極奉存候。私杯も年來御同志ニ御座候故、逆も和蘭学は不知事と、唐流の外科と存、彼是唐の外科書をのそき見申候處、何レの書も見所少く、却而外より療治方は、今云和蘭外科者流の方勝れ候様ニ奉存候。全体、周の頃まで醫の道正シく、瘍醫、疾醫と相分り候處、世々の戦国を（19オ）經て有志士は一国の主にも可成と心懸、医者などにハ成る人なく、柔弱か多病の者が医者になり、詰る處ハ道家ニ混し内外醫道大ニ衰微し、別而外科ハきたなき業ゆへ、猶更為す人鮮く、内医の片手わざになり、唐の外科ハ

絶候同然の事と奉存候。漸、宋元の頃より一家を唱へ、千金方外臺秘要などに取つきて外科を建立したるもの故、内治ばかり主にして外よりのわざハ下手になり候かと奉存候。そのミならず、唐の人の癖として滅多無性に名を（19ウ）増し病門を分候故、療治の規矩立不申よふ奉存候。乍去、内の事ハ唐程精キハなし。幸ひ日本えは和蘭の膏藥油藥外治之術も少々ハ傳り候事故、夫を漢文ニし、家々の秘方と覚候分を打明ケ、内は唐の書により、又日本の妙藥どもを一ツにして、日本一流の外科建立可致と弱年の頃より心懸、病門もなるたけ簡約にして、根太腫物吹キ出物といふ古ルキ言葉の意にて部を分ケ、不及なから唐人迄も、日本流の外科為レ致可申と、著述草稿七八巻も出来仕候。第一巻之卷首之趣意（20オ）

瘡瘍之名極多矣。而癰疽居十之七八也。如發脇發臂者、曰脇癰臂癰、發腦發腕者、曰腦疽腕疽。千金方曰、癰疽發十指也。而發背其尤者也。瘍醫之業莫大焉。歷代名家癰疽、則發背為一條、而庸輩或惟以發背者名癰名疽焉、等是生一體之瘡種、而陰陽輕重之分也。何異而治之。孫一奎既先於我曰、五發疽通治。又陳實功、獨言癰疽發之治耳。蓋取仲景立方於傷寒、而雜病皆準焉。予私淑而倣之、庶幾其道易簡、而使從吾（20ウ）遊者、易知易行也。

○集驗方曰癰疽之名、雖有二十餘證、而其要有二陰陽而已。以下略之。ケ様に仕、古人の書一言半句にても心に徹候はかり抜キあつめ、治方を付ケ、病の変化ニ從ひ、術も付申候。扱々五十年にして四十九年の非を知るとやら、二三年已前、不圖前條申候「ター

ヘルアナトミイ」と申内景の書手に入り、圖計を見候所、肺の形、脊骨の数違御座候ゆへ不審ニ存罷在候處、刑人之屍を觀藏いたされ候人有之間、幸と存、其節致同伴參り見申候得は、臟府骨〔21オ〕節華人之所説と大ちがひに御座候故、和蘭圖ニ合候處、誠ニ鏡にかけ候よふに寸分ちがひ無御座候。依之大憤悱仕、幸、中津侯之侍醫前野良澤と申者、内科にて和蘭字に志有之仁御座候。此人は先年蒙 乍命、和蘭語通譯御字被成候青木崑陽先生御門人にて御座候故、御著述之和蘭文字畧考御傳へなされ候ニ付、熟讀暗記なされ、数年の後、漸々和蘭言葉理解いたし、猶不審之所御座候由にて長崎表えへも罷越、譯家に從ひこれを正シ〔21ウ〕受、其後不打捨置、和蘭医学出情被致候ニ付、此人に從ひ、同藩中川淳菴と申者、本道医にて物産を好申候。是亦和蘭産物に志有之間、相共に右良澤を盟主ニいたし、字引一冊持て六經を讀たる人ありと承り及候故、其存念ヲ学び、打寄致吟味候處、実ニ不昧は心とやらにて、次第に相分り、猶又着実に吟味いたし度、骨ハこつか原杯ニ有之候枯骨を尋、内景は死者生者之分も可有御座候、和蘭書ニも有之候間、生ながら禽獸をも剖見申候處、和蘭人所説宜相分り申候。内は華人精と存候處大違〔22オ〕にて、却而甚疎く御座候。假令ハ華人の説、天に日月有、人に兩眼ありと、理ハ高遠に御座候へ共、見るといふ分ケハ不_レ知候。和蘭人の所説にてハ、眼といふもの初めに水あり、其次キに玉あり。又其次キに玉子の白味のよふなるものあり。其水に万物の影うつる。初めの水より三段にうつり、遠目鏡と同じ理なり。

扱又、舌に骨あり。和蘭語「トング」と云ふ。直に見るに無_ニ相違御座候。依之考候得は、婦人の乳も肉塊なり。舌も肉塊なり。舌は自在ニして乳ハ自在ならず。舌の自在なるは〔22ウ〕内に骨あるゆへ筋拵く。乳ハ骨なきゆへ筋不_レ能_レ拵。其精しき事三千年來所_レ未_レ説なり。依之不及なから、鳩摩羅什がごとく、管見を以致_ニ翻譯、解體新書と申書五冊出来いたし候。未_レ按合相成申候故、木に上せ不_レ申候。近々出来可_レ申候。其約圖致出来候間、入御覽候。是に而大筋通り御察可_レ被成候。扱、唐にて上代は委_ニク見申候事と相見え、今直きに剖ク所にて考合候得は、内經杯は餘程宜敷處相見申候。横骨者神氣所使主發舌者也。其外、彼是致符合候事も有之申候。然ルニ後世は不詳、張景岳杯よふく魚骨を以脊骨を定メ、横骨杯にも自己之見にて註を下し、〔23オ〕横骨即喉上之軟骨なり。下連_ニ心肺、故為神氣、所使上連舌本、主舉發舌機。又項骨を十四經及註證發微之類、皆項骨約有三椎。又は鍼灸聚英、膽懸懸鐘穴、一名絶骨、尋摸尖骨乃是絶骨と。今直ニ剖見るときハ、項骨七ツ、絶骨ハ和蘭人所説「ペイス」と申大筋の盡る所にて骨は無之候。如此類、擧て難敷候。惣體華人之説人々思々にて滑伯仁、張景岳が脊骨の説のごとく一様に無御座候。人身ハ智愚賢不省、共に同じ様無之候而は相濟不_レ申候處、我_レ先には新奇の説を唱ひ、何れ是、何〔23ウ〕れ非なる哉、形體計も千古相定不_レ申候事、愁ふべきの義と奉存候。是等を以相考候へば、華人は肉の上から尋摸して簡_ニ定メ候ものと相見得申候。ケ様に本元の經脉骨度迄相違いたし候。唐の醫書、

其説其論不被信候。是迄唐の書精事と存、夫に付致建立かけ置候日本流外科取建候事相やめ、何卒和蘭正流の醫道建立仕度、急度存立候。先内景は醫者の根元故、右の書翻訳相初メ申候。猶此上同志之もの申合、逐々致手配、一書ツ、も致翻訳候つもり申合候。前條申候「ヘーステルシユルセイ」シユルセイと申外科書致翻譯可申と、〔24才〕

近頃より筆を採申候。其外、醫方藥物等も段々と手を掛申度心願御座候。乍去、私儀當年四拾五歳と申二罷成、殊二近來眼病数度相煩ひ、眼力も薄ク相成候故、中々生涯にて大業遂申候事無覺束奉存候。併、同志之内桂川法眼の御令息、並右申候淳菴杯は年若之事故、数年之後は和蘭流医者成就可仕候。

一和蘭船え乗り来候もの、多くハ世の諺ニ申候馬奴船頭之類なるべし。されハそれに雇れ參ル医者之事に候へば、〔24ウ〕上手は中々參申間敷とのよし。御不審御尤奉存候。乍去、是ハ彼ノ国風にて、外国へ通候事第壹に仕候故、此方へ參り申候カビタンと申者、官人にて貴介公子も參り申候事ニ御座候。正保の頃參り申候「カスバル」と申醫師杯は上手と相見え、彼ノ国ノ書にも評判相見得申候。段々、老先生之御不審御深切之段奉驚入候ゆへ、此方の存念自負なから不願、思召申上候。誠ニ書不盡言、何卒御面會仕度と同志之者とも御噂仕候。此趣宜敷被仰達可被下候。以上。

正月

衣關甫軒様

杉田玄白

猶々、私義は甚多用ニ御座候間、弟子共ニ清書申付候。〔25才〕誤字多可有御座候。宜御覽分可被下候。

一和蘭語は片假名字にて認申候。且又、和蘭字ハ横行に御座候間、横ニ直し御覽可被成候。右之趣、宜御通し可被下候。已上。〔25ウ〕

一筆致啓上候。未得貴意候得共、弥御勇壯ニ被成御座奉恭喜候。然ハ衣關甫軒え附属仕候、多年愚昧疑難之一冊子、入大先生之電囑候處、毎條之疑、密ニ御教誨被下、殊御翻譯解體新書之内約圖傾恩賜、始而拜見奉驚入候。至愚老耄之情、深御憐察被下、御盛業孜孜陰御競被成候中、御丁寧成御示教ニ而、年來空濛に御座候處、披浮雲望青天候ことく、誠以御札筆頭難盡奉存候。早速御礼可申上苦之處、餘寒老病指發、曠日寥々、緩罪萬々御宥恕被下度候。猶又、御煩勞不願左に申上候条、御燕居之節、往々〔26才〕御教諭可被下候。一享保年中拙老弱年之頃、為家業出府仕、講習之砌り、和蘭醫書桂川様御家に御所持被成候由承及候間、何とぞ御弟子ニ罷成、右書拜見仕度、紹介を以御門人衆まで相伺候處、其節は弟子御取不被成候由にて、願望相叶不申候。他には無之者と心得居候處、三拾部程御覽被成候由、不堪欽羨之至候。左程世上夥數在之候書を、今年迄不存、真の田舎翁に而一生暮居候處、被仰下候御紙上にて、始而題目計承候而も、四十〔26ウ〕餘年之素志を相償、欣抔仕候。

一榭林家にて取扱候金倉アツの書發行之由、是又被仰下候に而、始而承知

仕候。則弟子共方へ相求下候様ニと申登セ候。僻遠之地ニ居候故、此分之事も知り不申罷在、坎井之蛙思召も恥入奉存候。

一和蘭文字之解藥名一様無之訳、「ラヂイン」も国語も其分ちなく人夫を飯食ふ匙も一ツに相成候義大略通曉仕候。扱又中華醫道、周の頃迄正しく候所、世々の戦国を経て内外医道大ニ衰微いたし、外科は絶候同然ニて、宋元之頃より一家を唱候へ共、唐人の癖に名を増し（〔27オ）病門を分候故、療治之規矩不立と被仰下候条、條理甚分明、先人未發之確論、医門に有志之仁人、誰によらず省悟感服不致人は在之間敷候。前無古人御監識、日本一流外科御建立被思召候御著述御草稿、七八卷出来之由、病門御立被成候様、巻首之御趣意御文章数行拜見、畧梗槩を得意仕候。御少齡より之御壯志、毎事奉驚候。此書脱稿之日は、和蘭流無キとても事不闕義と奉存候。然るに又別段御發明之上最後に此書可被廢思召相聞へ候へ共、先ツ右ノ書拜見仕度義御座候。老拙（〔27ウ）義も世間之和蘭流不信に存、壯年之頃より諸家秘置候傳書を色々手を入借り候而拾四五部見候處、多分膏藥油藥ばかりにて、致三歴覽に随ひ不信仰になり、漸四拾餘歳之頃より唐流を建立仕度と相企候得とも、生得不才に而埒明不申候。其上邊鄙ニては難成事は非に不及、一生解魔法師之たくひにて暮申候。尊論之通、唐流は内藥計を主として、外治之術拙く氣の毒ニ御座候得共、内之事ハ唐流随分精と今日迄も存居候處、先生和蘭内景之書御覽被成御不審に思召、刑人ノ屍を剖セ御覽候得は、和蘭人之圖（〔28オ）する所毫厘之違無之、華人之圖は却て大差御座候

故、和蘭人之所説甚精密なるに付て思召立られ、解體新書御述作之由、逐々明細御示教被成候趣キ、擊節服膺仕候、老耄至愚の眼力を以申上候義恐入候へ共、他流は不_レ存和蘭流においては古今無雙真之大豪傑、不待文王しておこると申は先生之事をや申へからんと奉存候。御惠被_レ下候約圖拜見不覺狂呼、口哇而不合、舌拳而不下、瞠若たる老眸、頻に感泣仕候。和蘭人日本へ來りし始は不知、二三百年前後（〔28ウ）之事にやあるらん。夫より只今迄彼地の醫書翻譯するほどの人なき事ハ在間敷候。今頃は翻訳之書あるへしと、恒ニ子弟等に語り聞かせ居候處、拙老億度ニちかわず、果して大先生在セリ。老拙の歡言頓開、破聲忽起候ことくに御座候。三千年來同業之人に毎會及此論候得共、聾啞之類計ニ而不及是悲之沙汰、切齒搔痒氣之毒存罷在候處、天の良縁を假し、幸逢伯樂之一顧、冀北老馬蹀躞長鳴之時を得候事、誠千載之一奇遇と奉存候。鳩摩羅什僅に佛經を翻訳し始めしより、釋氏之道中華ハ不及申、日本迄（〔29オ）行われ佛道の繁昌今の盛なるを以相考候へは、和蘭醫術も漢文の通する國々、御示教之亜齊亜の内、同文之國は被行、御恩澤を蒙る者、萬々倍兆、不盡無窮之御仁惠、天下之大幸と奉存候。御齡イ當四十一歳被成候由、鄙俗之諺に、四拾は人之三四月とさへ申候へは、扱々御頼母敷奉存候。殊御同志之御方様、御虚惠過人、春秋に御富被成候上は、御大業近年に御成就可被成、為生民至祝仕候。老拙兼々解魔法師之屬を大息仕候處、此御盛拳に而正真和蘭流外科（〔29ウ）の一家立、本尊あり宗旨あり、先生則開闢唱導の大祖師なり。

宗旨なしの解魔法師のたぐひを逃れ、施治場中に横行獨歩可致事、老拙多年之志願相叶、不堪其喜雀躍仕候。是耳ならず内景之御詳説に至りては、周季已来妄説之糟粕を食ひ餘涎をなめ候、唐流の迂遠なる術御一洗之上、和蘭之簡易緊要なる捷徑を導給ハ、億兆之國々、億兆之生民、免天札躋寿域申さん事、羅什に御比擬被成候へ共、三藏法師譯語之功に無之、外科一家之祖師と申候者にも無之、直に大慈大悲之佛菩薩と可申候。只所恨候は、老拙〔30オ〕暮景虞測に春き、當六拾式歳、加之多病御大業御成就迄存命はかりかた、歌伏櫪碎唾壺計ニ御座候。御憐察可被下候。

一 正保年間参り候「カスパル」と申候醫者、上手之よし。内景之書にも同人ノ作在、之と被仰下候に而感悟仕候。「カスパル」傳と申候書をも見申候處、四卷之内二卷ハ例之膏藥油藥、式卷は病論治法に候。専外科正宗に倣ひて病論病門を立、人面瘡の療治迄御座候へ共、内治の方は無之、只膏藥油藥〔30ウ〕を外より施候事計に御座候。甚タ不信仰成物に候故、彼下手醫者之口任を聞書して、正宗にて一躰を仕立たる者と存居候。其頃は通詞も今の吉雄楳林のごとくにハなかりしにや、日本醫の文盲故、和蘭の上手を下手に仕立候は、宛なる事ニて御座候。

一 荻野氏著述之刺絡篇、和蘭針法之妙術と見え申候處、惜哉蠻名を真名に書キ、かなを付、其間え漢名を註候故重訳煩しく、其要難見候。漢名ばかりにて蛮名は悉く卷末に集メ、翻譯名義集之様にいたし候ハ、針法妙術見易ク便利なるべく候。蛮名なくて不叶〔31オ〕

わけあらば、かな書キ可然候。亜の字え亞と付たる類、假名字磨滅いたし候ハ、差別有間敷候。假名ハ和國之文字に而候間、和字に訳するは可なるへし。真名は無用之長物蛇足之類かと奉存候。扱又「シカツテカムルブック」を西書と翻譯致候も蛮語ハ不存候へ共、何とやら泛然たる書名と奉存候。

一金瘡跌撲之書と申候一卷致所持候。和蘭書之圖を写し、夫え口授を聞書にしたるものと見へ申候。然れ共藥名假字二ツを一ツに寄せ書たる處見え申さず候間、〔31ウ〕定而音韻相分申間敷候。老拙か輩ラ^{（マツ）}デインも国語もそのわけを不知候故、人も飯食ふ匙も分ケ可申様無之候而覚束なく奉存候。金瘡之術は見ゆれども整骨の法はなし。尤内藥之方も無之候間、和蘭醫書を和解したる物にてハ無之と被存候。乍去、圖極て和蘭醫書より写し候と見え申候。何と申書之圖ニ御座候哉、右之書に人身に「セイヌン」といふ經七十四あり。孫絡は幾千萬といふ数不知と御座候。是又漢名何と申經ニ御座候哉。御覽被下度為ニ指登申候。乍御面當直ニ此書へ御書入被下度候。藥名かなの誤り漢名之違等、御〔32オ〕なおし被下度奉頼候。

一 東洋先生刑屍を剖らせられ藏志^{（マツ）}を著され、和蘭人之圖は違ふことなく、華人の説は妄なる事を論し、九藏^{（マツ）}之目をたて、尚書、周禮、及禦寇章昭等之語を引て以證之被^{（マツ）}排^{（マツ）}素難^{（マツ）}候處、佐野氏これを誹議して癖成論を出しぬれば、衆人皆是をよろこび、東洋先生之大功むなしくなり候。凡ソ近来、藥撰出れば非藥撰を出し、醫断出れば斥醫断を出し候へ共、天下之公論にあらず。各私説を〔32ウ〕主張

せん為に先輩を誹謗し、我意鬪諍之論止ム時なく、醫道之乱と奉存候。況日本は勿論成周已来廢絶之醫道御興復可被成、一家を御立被成候義、衆愚譚々、鑠金鎖骨之御用心、乍慮外千萬此處随分被運御賢慮候様にと奉存候。何とぞ一度御面會齒牙之餘論拜聴仕度候得共、此は定而相成間敷、残念奉存候。口惜きもの八年に而御座候。解體新書は近々御開板被成候由、拜見可仕折角相待大悦仕候。ヘーストルシユルゼイン」御成就迄は存命難計候。御出来次第四五枚成共存命中拜見仕度卜念願仕候。申上度事（〔33オ）千万ニ御座候へ共、兼而悪筆不文、老年に罷成冗長成造語作字に堪不申、他筆を以申上候。宜御察可被下候。恐惶謹言。

四月九日

杉田玄白様

參人々御中

〔33ウ）

猶々老拙義多年世間並和蘭流仕居、不学文盲に御座候故、假名交り二相認申上候。以来共に右之段御察恕可被下候已上。

（原本行空けなし）

舊年衣關甫軒子被相達候、從來御疑難之小冊拜讀仕、一二及御答候處相達候由二而、去ル四月九日之貴翰拜誦仕候。維時寒冷相成候得共、御起居御安寧之旨奉恐喜候。前書中多年御疑惑之義一々奉感心、乍憚御同志と奉存候故、微意不願思召申上候處、縷々得過譽誠以汗顔仕候。自古士君子之所望は千載之後に而も得知己候事（〔34オ）

建部清庵

二御座候。不佞義、生涯之内如先生鐘子期に遇候事、大幸と不覺雀躍仕候。乍去、厚御賞譽所當をしらす奉存候。

一前書中申上候、不佞著述外科書御一覽も可被下旨被仰下候へとも、中々瀆老先生之電覽候様成義二は無御座候。誠ニ覆醫之書、殊未定之著述ニ御座候間、此義は御用捨可被下候。

一荻野氏著述刺絡篇、紅毛針法妙術と思召候得共、惜かな蛮名を真字ニ書、かなを付ケ、其間へ漢（〔34ウ）名を註し重訳煩しく思召候由、漢名計二而、蛮名はことく巻末ニ集メ翻訳名義集之様ニ致は可宜旨、御尤奉存候。併、不佞此度之解體新書も色々工夫仕候得共、多く華人未説者御座候故、右之書第三篇ニ肝要の者ばかり集候篇御座候。其篇にばかり蛮名を唐音書にして、片假名を付申候存寄ニ御座候。是は不及なから、運に叶ひ、唐迄も渡り候は其節之為にと存、唐音書に仕候。日本人に讀せ候には假名にて可然奉存候。其外にも所により無據所には蠻名にて書キ、其下ニ註ニ訳語を認申候。扱譯は翻譯（〔35オ）義譯、直譯、と三通ニ仕候。假如は骨のこと

を蛮語に「ベインデレン」と申候。直ニ當り候故、骨と翻譯し仕候。又「カラカカベーン」と申者御座候。是ハ海鱸のかぶら骨の様ニ脆軟なる骨ニ御座候。此「カラカ」と申言葉、からくこりくと用

の物を喩候音の様なるを申候。鮭のひす骨の様なるもの也。漢語軟骨と申候字御座候故、軟骨と義訳仕候。又飲食腸胃に入、其精氣化して液汁となる。此液汁漢語可當者無御座候。夫故、直訳ニ仕音縷と譯し申候。且又、荻野氏「シカツテカムルブック」を西書と訳

候義、泛然たる（〔35ウ）様ニ思召候旨、御尤奉存候。是、假名字の違にて「シカットカーメルブーク」にて御座候。「シカット」とは寶の事、「カーメル」とは室の事。「ブーク」とは書の事。寶藏書と可申事にて御座候。右「シカットカーメルブーク」の中、四百拾弍葉に刺絡之説御座候。考合候處、荻野氏被著候意味とハ大キに違ひ申候。此書之訳とハ不奉存候。惣躰荻野氏の訳も、不佞存寄には蛮書は委様ニは不奉存候。御同志之事故申上候。

一金瘡跌撲之書、御家藏之由にて御登セ被成一覽仕候。是、前書申上候檣林流にて取扱候書にて、「アンブル」と申和蘭書和解ニ御座候。金瘡之術は見ゆれとも（〔36オ）整骨の法はなく、尤内景（マツ）之方も無之被仰下候。和蘭全書には其術具候得共、右之書ハ古書にて言葉も解しかたく、其上此書和解之時代迄、只今程和蘭之事開ケ不申候故、摘々金瘡の部ばかり少々解し候ものと相見申候。乍去、彼ノ書之圖を用ひ、「セイニユ」杯を大切之事と申處、先是迄見當リ不申手際に御座候。夫故、前書中右ノ和解評申上候。併、不佞了簡にてハ取り所無御座候。全く和蘭書和解と申かたく候と兼而申上候ハ、右之所にて御座候。且、藥名かなの誤り、漢名（〔36ウ）の違、委く申上候様に蒙仰候。是又、前書申上候通故、相分り候所も御座候へ共、逆も十に一二を解候而も用立不申事に御座候間、今暫（シバク）御待被成候、藥名功能は逐一吟味仕候存念に御座候間、相分り次第自是可申上候。

一右之書中、「セイヌン」と云ふ經七拾四有り。孫絡は幾千万と云ふ

數不知と御座候。是漢名何と申經ニ相當り候哉と御尋被下候。全躰和蘭人所立經脉、華人とハ大キにちかひ候而、十二經の六經のと申事無御座、約圖翻譯仕候動脉、血脉、外ニ「スビール」「セイニユウ」と此四ツより外は無御座候。動脉は蘭人語「スラグアデル」と云。是一（〔37オ）身の血所（レ）往の道路也。血脉は蘭語「ホルレアデル」といふ。血の所（レ）還（ル）の道路也。終身所在絲瓜の糸のこたく錯綜如織。其微細、目の及ところにあらず。假令ば、微か指を切り、紙にて拭ば血の出る所如鍼眼。是レ二脉微細の所也。其二脉の大支別、處々にあり。表に近き所能動し申候。即華人所説、動脉三部の類也。故に動脉と訳し申候。又其動脉微細（オ）の所より血脉細微の所に傳申候、其會の支は表に見る所の浮絡也、蘭語一名「ブルードアデル」といふ。「ブルード」（〔37ウ）とハ血の事。故に血脉ト譯し申候。此血脉管中に「カラツプリース」と申候而、如簫簧者御座候。脉瓣と訳し申候。動脉より傳候血、右の脉瓣にさゝへられ放に行事ならず、漸々歸（ル）心申候。是一身を養ひ終り、心に皈申候血なり。蘭書に、血有餘の人を「ブルードレーキ」と申候。其有餘の血を此血脉より除キ去り申候術を、「アデルラーチング」と申候。即、刺絡術なり。是瀉血の要法にて人をして平和にいたし候術にて御座候。血脉は其用イ終り候血故、瀉去候而も害無御座候。又、刺絡之法ニ上を木綿にて巻申候得は、下より上り候血故、浮絡起り申候。是、歸（〔38オ）路之正據御座候。和蘭脉説に、間々有餘の血、血脉中に満ちて動脉の血あとより傳へ進事ならず。依之、脉絶卒倒仕候人

も御座候。是等ハ血脉を瀉し候得は動脈進ミ候故、蘇生仕候事ニ御座候。此方にて俗に申候早打肩之類、紫脈を瀉し候と同様に御座候。扱又、血脉の大幹は連心申候。其所在は脊骨に並び申候。兩腎亦左右に連て御座候。腎臟は水瀉石と同じ理にて御座候。假令、土器に硯水ヲ入、一夜も置候得は滲漉して墨は跡に残り、水ハ澄て下に〔38ウ〕したゞり申候。腎臟もその如クニ血を澄し、血中の水分利致し申候。血中に水ある正據は、試に血を紙に落し見申候得ば、水かちの人は血ハ凝り、水ハ廻りににじミ申候。日々の飲食化して血となり、終身を巡り申候得共、日々増候計に而相濟不申候。腎臟之働にて無用の物を瀉し澄し、膀胱に傳へ小便に漏し申候。其残る所の精血ハ販血、又新に成ル所の血と共に一身を巡り申候。總而、血中の水、動血ニ脉微細の所より第二番皮の下に附著いたし候「キリール」と云者下條に説申候に浸シ、湊理より出るときハ汗となり申候。〔39オ〕血中に交り在ルときは蘭語「ウエイ」と申候。夫故、大暑中など多汗のときハ小便少ク御座候。是は血中の水氣、外ニ滲候故に御座候。夫故、涙唾杯と違ひ、汗は臭ク御座候。華人の説、經脉為裏支、而横者為絡、絡別者為絲。註證發微曰、其支而横者即如肺經有列缺、横行手陽明大腸者、為絡也杯とは御座候得共、假令、足三陽經は悉ク三陰に傳へ、足三陰經は皆足の端より起申候事之様ニ有之候。若煩て足の踝骨より下夕、脱落したるか、又刀にて兩足を切り落されたる人、三陰の終と三陽の源を断れ、〔39ウ〕何を以一身可立哉。孫絡支絡の名は有之候得共、委く相分り不申候。如

和蘭人説、動血ニ脉は如絲瓜の糸ニ相交り、一身網を懸たるごとくに御座候故、何所を断候而も、外にいくらも傳へ候所御座候故、一身の血能ク巡り申候。誤りて動脈の大支を傷り候ハ、動脈は無瓣故、血を支へ候もの無御座。流れ行血故、止兼申候。愈穴を傷れば血不止と申傳候は、此動脈の大支の所を傷り候故ニ而御座候。且ツ返閱の脉は右キ大支の通筋違候と相見得申候。不佞同藩宮崎甚平と申者、生來三部尺澤等脉應し不申候。是等は動脈の支細く、草木の枝根なく鬚根計〔40オ〕候得共、棒根丈夫成故不枯と同じ事にて、脊骨と並び候大幹か髓成故不死事と奉存候。扱又、「セイヌン」と申候は「セイヌン」にてハ無御座候。蘭語「セイニユウ」、又「シン子ン」と申候、是ハ右に申候動血脉の會、直に頭に連り上り申候。今ニ脉の大支を「テウエーセイデリングセブレースムス」と申候。「テウエーセイデリングセ」と申は兩側と申氣味、「ブレースムス」と申は入込ミと申事會意仕候而、左右管と訳し申候。此管項より頭骨うしろの骨縫に従ひ上り、左右共に頂の直縫に至り一管となる。鼻根迄至り申候。是を〔40ウ〕「シツケルウエイブレースム」と申候。シツケルウエイセとは鎌様と申事。頭骨に従ひ曲鎌の状に似申候故、鎌管と訳し申候。左右之管一ツニ成候三方行合の所より直に下り候管を「ヒールデブレースム」と申候。ヒールヒールとハ四ツと云ふ事。左右の管を一二と取り、真中を行ク鎌管を三とし、此管四ツ目に當り候故、「ヒール」の名あり。然れども、はなはだ短キ管故、其状ニよりて短管と義訳仕候。右四管の内共に血有り、瓣有り。此

血は動血二脉の至る精血に而御座候。夫故、「ブランカールツ」と申人の説に、頭常に温なる事如「温泉」と御座候。此血短管より下り「ペインアツベルキリール」と申者に連り申候。「ペイン」〔41オ〕とハ痛候事。「アツベル」は菓の字にあたる。ペインアツベルは訳して即痛菓二御座候。これハ其形梨柿類之菓とちかひ、松子楓毬杯の如く、手に握候へば掌中もいたミ可申様之菓の形に似たると申候より名つけ候事と奉存候。故、痛菓機里兒と訳し申候。扱、キリールと申候者、漢語可當者無御座候。夫故、直に機里兒と訳し申候。此機里兒と申は華人未説者にして、和蘭書に其状を「スポンギウスアクチフ」と申有之候。「スポンギウス」と申者漢名は未詳候。和俗水吸、又海綿と申物〔41ウ〕に御座候。貴邦方言何と申候や、少々入御覽申候。「アクチフ」と申言葉は火のやうな水の様な杯と申、様の字にあたり、上りかゝる下りかゝるといふ、かゝるの意なり。即、右の海綿の様成者終身所在有之、是則機里兒（マシ）に而、全鉢水血分利を主り申候。皮の下にあるハ汗をなし、胃の下にあるハ其汁を注ひて飲食を消化し申候。腎臟も一種の機里兒の類にて小便を分利す。此痛菓機里兒は頭腦の正中に在りて、動血二脉の精血より、唐にて云髓液を致分利申候。内経に髓海と申も尤にて御座候。此痛菓機里兒は華人も腦を九宮に分ち、泥丸宮を立申候は、即〔42オ〕此機里兒と奉存候。泥丸宮の分野に相當り申候而、腦髓一身主宰の根元に而御座候。是より分れ候大経連（鼻者）一、連（眼者）六ツ、連面部七竅者二ツ、連手者二ツ、連耳者二、九臟者二ツ、連舌者二ツ、

連表皮者二ツ、下ツて入脊骨、連両足腹背者六拾。左右合而八十四御座候。為御見被成候和解書にハ七十四と御座候へ共、不佞翻譯仕候「ターヘルアナトミイ」と申書にハ八十御座候。和蘭人も古ハ開ケ不申候事御座候哉、少々ツ、の異同は御座候。扱、此八十の経四拾ツ、左右え分れ候大経二而御座候。一身無殘所、動血二脉微細の者と錯雜〔42ウ〕仕候。解體新書第三篇格知篇第二章曰、世奴此翻其色白而強、其原自腦與脊出也。蓋主視聽言動。且知痛痒寒熱、使諸不能動者自在者、以有此經故也。見于第八篇。又、同篇二十章曰、世奴和孤都。此翻神成於腦内也。蓋四支百骸、神經所行皆得之而能全。故名地爾禮其牙私天此語翻曰生氣見于第八篇。此神經汁、右二申候痛菓機利兒にて精血を漉し、此汁を生し申候。是腦髓液なり。其液神經に傳送し八拾之大経に傳へ、右之通り一身の働をいたし申候。唐にて云所之神とも可申もの故、神（マシ）神經と訳し申候。此神經入眼、第四番の膜となり〔43オ〕主視物、入耳主聽聲音、入舌知五味申候。此神經有病、則失食味申候。口中に而多所は舌及食道の末、膈中の部分に多く御座候。夫故、誤て熱キ物を食し申候は、先ツ舌に熱を覺へ、咽中は不覺、胸にいたり膈中の部分にて熱ヲ覺へ申候。在ニ一身ハ第式番皮に多御座候。夫故、能寒熱痛痒を知申候。扱、骨を纏（下）ひ候膜に多し。故に刀にて切候得は、上の皮と骨の所痛強ク御座候。ケ様之者二御座候故、神經と譯し候而も不苦義と奉存候。委細の事は第八神經篇に詳也。此篇には〔43ウ〕經の行様明細ニ御座候。○「上欄補筆」○逐而開板之上御覽可被成候。其微細のも

の、是又目の及ぶ所にあらず候。其微細之もの何として知候哉と」御不審可有御座候。是は「ミコロスコピウムコムポシトウム」と申器にて見申候得は能ク分り申候。此器ハ蟲眼鏡にて御座候。夫を段々と眼鏡を仕掛、次第にうつり様候にいたし、遠眼鏡の如く三段程にうつしよせ申候。微細の物を見申候眼鏡、數六通御座候。其第六番目の眼鏡にては物を式百倍に為見候由。其故、蚤杯をうつし見申候得は、大キサ式寸余二も見得、蚤の足の経絡迄能ク分り申候。ケ様之器故、人身の経脉は猶分り申候。扱、腦より神經のつゞき候事は、有生者禽獸にも同じ事御座候。試二串二ても御剖御覽可被成候。皆、面部七竅に連り居（〔44才〕申候。心は神を藏し候様ニ御座候得共、蘭人の説にては、心は順血の元、腦は神氣之元と被存候。蘭人はかりにも無御座候。既ニ華人の説にも、天谷元神守自真言人身中、上有天谷泥丸、藏神之府也。又頭有九宮、中曰泥丸、九宮羅列、七竅應透、泥丸之宮魂魄之穴也。又真頭痛者、其痛上穿風府、陷入泥丸宮、不可以藥愈。朝發夕死、夕發朝死。蓋頭中人之根、根氣先絶也。又腦為髓之海。髓海在餘則輕勁多力。不足則腦轉、耳鳴、脛痠、眩冒、目無所見、又腦者髓之海、諸皆屬（〔44ウ〕於腦。故上自腦下至尾骶、皆精髓昇降之道路也。此等之教語前に辨し候神經之説と致符合候様被存候。已に蘭人中風之説に、中風は神經之病也。神經病故不遂不仁候。動血二脉は無恙候故、脉も應し候。切れバ血を出し申候。華人の説のごとく、水行于天地、猶氣血行于人身也。然は氣血は経脉の内を流行すると見えたり。然ルに風邪乘虚入及其中也、

有中腑中臟中血脉、氣虛血虛之不同。然ハ血虚セバ脉も不應筈なり。氣虚セバ脉行無レ力筈なり。血行無恙正據ハ脉ハ慥なり。又、世醫の説のごとく氣血不順と云ハ、不遂の方は腐候筈なり。血者主養（〔45才〕）一身候故、腐も不レ致申候。脉も應し申候。神經之病故、痛痒寒熱を覺不申候。是等にて神經の働（ツマ）き御昭察可被成候。猶御不審も御座候ハ、被仰下べく候、

一此度翻譯仕候解體新書之義、是迄和蘭書和解等は少々見當り申候得共、急度翻譯と申事只今迄見當不申候。乍不及、自我作古之業に御座候間、譯法も新製に仕候。勿論、浮屠氏譯法も可有御座候得共、是は一向学候義無御座候。翻譯、義譯、直譯と三等ニ仕候義ハ前條申上候通ニ御座候。扱又、漢字あて（〔45ウ〕）よふは、假如バ唐に而三部人迎等を動脉と御座候故、血の往ところの者を動脉と譯し申候。血所還者も青脉杯と御座候故、動脉の脉の字に對し、血脉と譯し申候。且又、経脉と熟候時は一ツ様ニ相聞得候へ共、十二経脉を一ツ云へば何経といふて何脉といわず。元より一身最成ル者故、動血脉と相分り候様に「セイニユウ」に經之字を下シ申候。又、例之大筋之前後扱と御座候大筋は、蘭人所説「ペイス」と申者にて、「スピール」と云者之端也。此「スピール」と云者、東洋先生藏志（ツマ）に、筋は其末肉と成候様に御弁被成候得共、肉の間に交り在之、水に漬（〔46才〕）たる麻のごとくニ候。其状筋膜共可申者御座候。元來一子物ツ故、筋と譯し申候。大抵新書之譯、是等之趣に仕候。御同志之事ニ御座候間、一ト通り申上候。若、思召も御座候ハ、御示教可

被下候。

一近來非藏志、非藥選、斥医断杯逐々出て、私説を主張せん為に先輩を誹謗し、醫道の乱と相成候様ニ思召候旨、御尤至極奉存候。扱々、あさましき世態、小兒之戯同然、君子之可恥事に御座候。右体之世俗故、解體新書開板之上、〔46ウ〕衆愚諤々、爍金銷骨之用心可仕旨、御深切難有感泣仕候。迺も按劔の人は多御座候。乍去、一番鐘を入候ニは鐘玉ニ上り候覚悟ニ無之候へは相成間敷候。併一人なりとも突かけ候は本望之至ニ奉存候。陳勝は事不成候へ共、高祖にて秦の苛政は相改り申候。然は勝が志も立申候。我医も右のごとく、一度着実之論を唱候ハ、又千載之誤りも改り候時節可有御座と存候計御座候。申上度事如林候得とも筆紙難盡、先御答旁如此御座候。恐惶謹言。

〔47才〕

十月十五日

杉田玄白

建部清菴様

門人周伯寫本

〔47ウ〕